明治三十四年九月二十日發行（明治二十年十一月本會創立）

第三種郵便物認可（明治廿六年四月四日）　毎月一回十五日發行　内務省許可（明治廿一年二月廿八日）


婦人衛生雜誌

第百四拾貳號

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

第百四十二號 目次



京都看病婦學校卒業生及職員（校長佐伯ドクトルは車の右側）

講演

保嬰學校設立に就て（於本會）

醫學士　三浦省軒君述
佃速記所事務所員速記

私は今日初めて此會に出席致しまして、皆樣方に御目通りの面目を得ましたるは、先日滋尾令夫人から何か話をして吳れいと云ふ御申付が御座いました、けれども私は何にも耳新らしく珍らしいと云ふ樣な考は少しも存じて居りませぬ、けれども併しながら折角の御申付で御座いまするから、育兒の一部分に屬して居りまする保嬰學校の事に就きまして聊か自分の感じて居りまする所を只今申述まして、此婦人衛生會々員御一同の御賛成を仰ぎたいと存じます、併ながら育兒のことに就きましては、此衛生會と云ふものは業已に百三十八回も場數の掛つて居る會で御座いますし、又年月で數へて見まするど明治二十年の十一月の御創立で御座いまするので、十有五年の星霜を經て居りまする、此の如く場數が掛り此の如く多くの年月を經て居りまする會で御座りますからして、是迄育兒の事に就きまして種々樣々の方法を以て、少しも餘す所なく少しも殘す所なく、御演說で御座りまするとか或は又御講說で御座りまするとか或は書を寄せられまするとかして、極々精細に極々緻密に御說明あらせられし事と私は存じます、ソレ故に只今私が玆に申述べます事柄の內には重複する所が有るかも知れませぬ、若し果して重複する事が御座りましたならば、何卒偏に御聞捨御聞流し下さいます樣に、此段は前以て御願ひ致して置きます、

偖此の育兒の方法順序に於きましては、小兒の年齡に關係致しまして多少の違ひは御座りますけれども、併ながら生れましてから滿三年の間と云ふものは、重に躰育一方ばかりで御座ります、躰育の事に就きましては皆樣が是迄百も二百も御承知で御座りまするから、詳しい事は申上げる必要は御座りませぬ、併ながら極々大略を申しますれば、躰育に要用なる點と云ふものは、衣食住遊の此四つで御座りまする、併ながら衣食住と一口に申まするけれども、此衣食住に注意して居りまするのと不注意とに依つて、實に健康を害しますることが十の中七分通りで御座りませうと存じます、十中の三分は即ち生來に兩親から引受けまするのと、天變地變に依つて病氣が出來ますのとで御座ります、其七分通りは小兒を保護する人の注意すると注意の屆かぬとに依る事と考へられます、併し此事は皆衣食住に關係して居ります、着物の事に就きましては皆樣御承知の通りに、善い悪いに少しも關係は御座りませぬが、不淨でなく不潔でなく、寒暖に從つて着物の交換を致し、氣候の變化に依つて着物を着せるとか脱がせるとか或は風の吹く時は戸外に出さない樣にするとか、北風に當てない樣にするとか、着物の注意不注意で初めは極く輕い鼻加答兒のやうなものでも忽ち咽喉加答兒になり、咽喉加答兒より氣管支加答兒を起し、氣管支加答兒より肺炎となり或は肋膜炎になると云ふ樣なこともありまする僅の輕い病氣でも注意すると注意しないので小兒か重い病氣になることは實に早い、大人とは非常に違ふもので御座ります、昨日は氣管支であつたのが、今日は肺炎に變ずると云ふ樣なことが御座りまする、藥用を致して居りても是は決して醫者の悪いのではない、病氣の進み方が早いためにさう云ふ事になることか御座ります、食物

に就きましても皆樣御承知の通り、小兒の食物は母乳とそれから牛乳の二通りあつて、牛乳には生乳と煉乳との別はあるが、皆樣御承知の通り母乳は第一等で牛の生乳は第二等で牛の煉乳は第三等であります此食物に注意するとしないとに依つて腸胃病を引越すことが澤山御座ります、此處に御出席の御人には斯樣な不束な御方は一人もありますまいと思ひますけれども、併し小兒の泣きさへすれば直ぐに乳を吞ませると云ふ慣習が我が日本國に殘つて居りまするので、其爲めに大に腸胃を害しまして大患を惹起すことが御座りまする、ソレで又住居に於きましても、是は生活の度に依りまして決して同一には出來ませぬ、併しながら身分相應に注意すれば出來ないことは御座りませぬ、縱令ば小さな九尺二間の家でも夜分は風の這入らぬ樣に戶の隙間を塞ぐとか障子の破れたのを貼るとか致しまして小兒を寢かして置くにも風邪を引かない樣に注意することが出來ます、又溝渠の樣なものに何か不潔なものが溜つて居りまするとか、或は庭前の池に雨が降りまして水が滯留して居つて麻剌利亞熱を惹起すことがあります麻剌利亞熱と云ふものは斯樣な所から空氣が媒介をして起す或は蚊が其毒を以つて飛行まして人間から人間へ傳染させることも御座りまする、是は既に此前大學教授の箕作博士が精しく說明致されましたから別に申上げる必要も御座りませぬ、夫れ故に溝渠とか池とかには汚水の滯留しない樣に注意をしなければなりませぬ、其他遊、遊ぶと云ふ事に就きましては、成べく小兒は食物を以て機嫌を取る樣にせず、目で見せるとか耳に聞かせるとか或は手眞似とか、總て此色々の方法を以て小兒を面白く遊ばせる考へをして、食物で遊ばすことは成べく避ける樣に考へなければならぬ、小兒の機嫌を取るに多くは食物で

機嫌を取る樣になつて居る、少し泣くと乳を與へるとか或は菓子を與へるとか、何か食物で機嫌を取ると云ふ樣になつて居りますのは是は極く善くないことで、食物は一定の時間を限つて與へまして、さうして他の事で能く遊ばせる樣にするのが一番肝要で御座りまする、此四つの方法が躰育の重なるもので、詳しく申上ますると澤山御座りまするが極く簡單に極く大略を申上げて置きます、滿三歳から六歳迄は御承知の通り幼稚園に遣りまして、智育の門に入る下拵へをするので御座りまする、滿六歳から本當に智育の門に入るのでありまするが、滿三歳迄と云ふものは躰育一方で決して智育の關係はないので御座りまする、此躰育のことに就きまして、之を概して申しまするト保嬰と申します、保嬰と申しますのは是は嬰兒を保護すると云ふ意味で御座りまする、俗に子守と申します、此保嬰の事に就きましては母親が自ら之を掌つて居つて他人の手に掛けないのも御座います、是は生活の度に依つて同一では御座いませぬが、生活の度に依つては母親が自ら之を擔任するのも御座ります、或は乳母を雇ひまして乳母の乳を吞ませる、外に尚ほ保嬰の事をも托するのもある、或は守乳母と云ふ者を賴んで自分の乳でなく人工の食物卽ち牛乳を以て總ての取扱ひを母親に代つて擔任するものもある、夫れから又其の中のみ小兒を子守女に托する人も御座ります、夫れ故に母親自分で保嬰をするのは勿論の事、乳母又は守乳母の如きに至りましては、多少の經驗が御座りまして中年の女子で御座りまするから、大した間違は御座りませぬ、けれども此子守女に至りましては中々危險弊害の事が澤山御座います、何故子守女に就きまして危險弊害が餘計あると云ふのに、古來今に至るまで世人多くは無知識無教育の小女を評して俗諺に「子守

女の樣であると云つて御座います、是は誠に我國に於きまして大なる弊害の慣習であります、御維新以來百般の事物何でも彼でも非常の速力を以て大層長足の進步を來しましたのに拘はらず、獨り子守女の點に至りては少しも改良に注意が屆きませぬのは實に慨かはしく悲しむべき事柄で、文明國の一大缺點と言はなければならぬと思ひます、此の如く子守の事に就きまして私が經驗致しました數は澤山御座いまするけれども、初めから終りまで充分に治療を致しました極めて著明なるものを擧げて申上げますれば

第一例には、明治三十一年二月中で御座りますが、私の近傍の同心町に住んで居りまする某の次男、一年五ヶ月なりまする小兒を子守女に托しまして每日遊はして居りました、或日其子守女が小兒を背負ひまして、或煎豆屋に參りまして——炒豆屋の板の間に小兒を卸して置きまして、さうして其煎豆即ち白色の丸豌豆と申して、あの赤豌豆ではなく白豌豆の粒の少さい炒豆で御座います、其炒豆を買ひましてさうして五六粒小兒に與へて、自分もそれを食べながら其他の友達と手毬遊の樣なことをして居つたのです、夢中になつて遊んで居りました中に、小兒は貰ひました三つか四つを皆な食べて仕舞つて、それから其處の店の箱の中に這入つて居りましたのを、其位になりまするとも立つことも出來まするから立つて行つて知らない中に手で摑んで食べたです、それを子守女は少しも知りませぬ、夢中になつて手毬をついたりお手玉を取つたりして居つた、それから後に氣が付て急に他の品と取換へ、家に歸つて知らぬ顏をして居つた、すると其夜半から非常に下痢をして、腹痛甚だしく非常の熱が出まして、實に其苦悶と云ふものは名狀することが出來ない、其下痢した

ものを見ると白の炒豆が消化しないで瀉つて居る、それから直ぐ強き灌腸法を行ひまして、悉く腹にある所の炒豆の豌豆は殘らず排泄してしまひました、併しながら少しも嚙みませぬから消化する道理はありませぬ、悉く其病の在る原因は除去つて仕舞ましたけれども、非常の下痢と高熱との爲めに身躰が衰弱して、脈搏心音殆ど危篤の狀態で御座いましたが、十分の手當をして漸く二週間以上にして恢復することが出來まして御座いまする、併ながらさう云ふ譯で御座いますから子守女は早速暇を出して仕舞ひました

第二の例、是は小日向臺町に住んで居りまする軍人某の子守女で御座います、是は一年四ヶ月の小兒で未だ歯が充分揃つて居りませぬ、前歯だけは揃つて居りましたが奥歯の臼歯と申すものは揃つて居りませぬ、其小兒を背負ひまして――臺町には幾らも麥畑が御座いまして農家も澤山ある、其農家に遊びに參りますと、未だ搗かない敲きまして穗を取りましたばかりの麥が乾してある、其麥を乾して置きました筵の傍に小兒を置きまして、麥を弄せて玩弄にして置きました、よもや食べるとは思ひませぬからそれを玩弄に與へまして、自分は他で以て友達と遊んで居りました、其遊びの爲め少しも知らない中に小兒は麥を摑んでは食べて居つた、少しも知らない中に多量に食しました、それから其夜の十時頃でも御座りましたか迎へに來て行つて見ますと、腹痛で七轉八倒の苦みで高熱がある矢張強き下痢で御座いますので、其下痢したものを見ると麥が少しも消化しないであります、併し是は前の程澤山では御座いませぬ一勺か二勺位ひ食つたものと見へる、脈搏も衰へ非常に衰弱致しましたけれども、腹に溜つてあるものを排泄して充分に手當をしたので、是も二三週間

の後に全快することが出來た、
第三番の例は明治三十二年六月で御座います、是は些と大きな小兒で二年四ヶ月、數へ年四歳になる、是は林町に居る或官吏の子守女で御座います、其二年四ヶ月になる兒を自分が背負まして、さうして裏の庭園の隅に御座いまする櫻桃——御承知も御座いませうが茱萸の様な櫻の實の様なもので酸ばくて甘いもので御座いまする、其櫻桃を採り自分で食べましたり、或は小兒に遣つたり、一遍位ひ食はしたのは大した害ではないが、遊んで來ては又食べたり食べさせたり、食べては遊び遊んでは食べると云ふやうに度々食べさせましたので大人の子守はさう障りませぬけれども、其小兒は夜中非常の吐瀉をした、虎列剌と同じ様に吐たり瀉したりした、是も夜分十時か十一時頃のことで御座います、參りました時には四肢厥冷と申して手足冷たくなつて居つた脈豚幽微にして觸れることは出來ない位ひであつたが心音と呼吸はありました、活きては居りますけれども全然瀕死と云つて假死同様であります、それから迅速に應急の手當を致して、さうして灌腸を施した所が、之が爲に櫻桃が大層出た、半分消化れたのもあり消化しないのもあり、小兒だから充分嚼めませぬから半分位は嚼まないで碌ごと呑んだのが多量に出ました、さう云ふことで種々様々の應急の手當を致しましたので、三時間ばかり經まして脈も觸れるやうになり四肢も追々温になつて參りました、それ迄は泣く力も無かつたのです、漸く蘇生を致して參りました、それから段々快くなつて參りましたけれども併ながら非常に身体衰弱を致し、殆ど一ヶ月餘の經過で全快致しまして御座います、
それから第四番目、是は久堅町で御座いまする、久堅町の某の子守女是は一年二ヶ月程になります小兒

て、其椽側に小兒を遊ばせて置いてさうして自分は庭で以て手毬などをして友達と遊んで居つて小兒を顧みなかつた、デ小兒が高い椽側から下に轉び落ちました、生憎下に敷石が御座いました爲に頭を大層挫きました、一時は泣くことも出來ないで殆ど死する様な狀態でおつたが、忽にして蘇生し泣く様になつて參りました、それから大した傷も付りませぬので水で冷した位ひで一向意としないで居られたさうで御座います、其後三日餘經ましてから熱が出て參りまして、殆ど八度位の熱、それから始終嘔氣があり胸が惡い様な模様で御座います、乳を呑ませますると直ぐ吐て仕舞ましたり、或は十分間位ひ經ちてから吐きましたり、飲ませるものは悉く吐きます、神經は非常に過敏になり、さゝゐの事にも直ぐに泣きましたり驚きましたり、少しも活潑力と云ふものが無く、午夜安眠することは出來ず熱度昇進脉搏緩徐呼吸不調顖門突降時々搐搦痙攣を起して來るやうになりました、又始終嗜眠の狀態を爲して居ることがあり、或は號泣の時期となり泣てばかり居りましたり又輕快の狀態に變じたり或は增進の時期に化したり或は何か周圍の物を取りたいやうに手を動かしたり或は取つて咬みましたり、さうして項筋強直したり或は眼球上に攣したり是れ全く立派な腦膜炎の症狀を起しました、併ながら此腦膜炎は充分の手當を致して一ヶ月ばかりで追々快方に赴きまして、殆ど三ヶ月ばかり經つて全く快くなりました、スッカリ全快致してしまひましたけれども、併ながら後日を戒め勉めて身躰の動搖を避けしめたり、或は暑い時で御座いまするから強き日光を避けまして、頭を直接に照されない様に注意を致して置きました、デ御座りますけれども段々快くなつて一日戶外へ出て居ても何ともない、又明日、明後日もと云ふやう

に歸て來ましたから、遂に双子守女に背負せて出すやうになりました、初めは注意したが何ともないものだから、つい〳〵子供の頭を日光に直射したなどと云ふことが誘因となつたので御座いませう、其後半ヶ月ばかり休養して居りましたが、再び前の腦膜炎の症状を起しまして、今度はもうどんな事をしても取返しが付きませぬ、三週間の終りに至つて不幸の結果を來しました實に惜しきことをいたしました、第五番目の例、是はずつと前のことで明治二十七年の七月のことでありまするが、下谷根岸に住んで居られます或る會社の重役の子供が二人とも腸窒扶斯になりました、一人は五年三ヶ月の小兒、それからもう一人は三年五ヶ月の小兒、二人とも腸窒扶斯に罹りました、腸窒扶斯は無論皆様御承知の通り固形食物は與へない、流動食物即ち牛乳とか肉汁の様なものを與へて置きまして、決して固形食物は與へない、是は皆様御承知てゐらつしやる通りで御座います、デ四週の終りに於きまして夜中に急に迎へに參りました、大層な腸出血を來したと云ふことを申して參りました、參つて見ました所が、一人は左程では御座いませぬが一人は大層の出血でありました、そこで直ちに氷を取寄せ腹部の氷罨法を行へ其他應急の手當を致しました、御承知の通り小兒の腸窒扶斯と申しまするものは、出血のあると云ふことは誠に稀有で御座りまする、小兒の腸窒扶斯は豫後の宜しいもので、腸出血と云ふことは殆ど無い位のものであります、それに二人一緒にあつたのであるから何か食物に不注意が有つたに相違ないと云ふ考を以て居りましたから、看病人は申すに及ばず其家族に悉く質問を致しましたけれども少しも手掛りがありませぬ、牛乳と肉汁の外は與へたことはないと申しました、何にも與へないのに腸出血と云

ふことは無いと思ひましたが、併し他に何にも食物を與へたことはないと云ふので無據それで濟でしまひまして、幸にして三日間ばかりの中に非常の衰弱を來したが血は止つてしまひました、それ故に大層經過が長くなりまして、七十日ばかりしても腰が立たなかつた、腰が立てる迄には百日も掛つた、二人共全快は致しまして其時は分りませんで御座いましたけれども、其翌年――一年半ばかり經ちましてから他の病家に於きまして、昨年腸窒扶斯のあつた家に雇はれて居つた所の看病婦に偶然會ひ、其時昨年のことを話しました所が、其看病婦の申すに、あれは全く子守女が町に出て豌豆豆の炒つたのを砂糖で搦んだものが御座いまする、それを二袋か三袋買つて參りまして其小兒に與へました、生憎看病婦が居りませぬので、どうも牛乳や肉汁ばかり與へて居る故に可愛そふだから菓子でも少し遣つたが宜からうと云ふ所から與へました、全く可愛い爲めに與へたので、惡い心で與へたのではありませぬが、其爲に腸出血を起したと云ふことで、其時は分らなかつたが後で段々子守女と話をして分つたさうで御座いまする、後で分つたがそれを別段家族から醫師に話す必要もなかつたが、全くあの時の腸出血の原因は砂糖で搦んだ炒豆を食はした爲であると云ふことが、看病婦の爲めに其の原因を知ることが出來ました、

其他子守女が小兒を背負ひまして、小兒が泣まするど搖りまする爲に脊髓を折ることが澤山あります、又背から卸しまする時に肩胛關節を外すことがあり、又飴賣などの藝を見物する爲に一時間も二時間も炎天に照して腦膜炎を惹起す樣なことが澤山御座いまする、併し斯う云ふ害と云ふものは近年子守人力車と云ふものが澤山出來て參りましたので、子守

車には日進が御座いまする故に縦令さう云ふことが御座いましても能く害を及しませぬ、是は全く結構なことで子守に就ての改良の一端と思はれます。

此の如く子守女に就きましては生命に關係することが澤山御座いまする、獨逸の首府に於きましては子守所と云ふものゝ設けが御座います、是は我東京に於きましての養育院の樣な所に一所に併立致しておるさうでありまする、此子守所と云ふは矢張慈善的の事業で御座いまして、勞働者の小兒を預かりまする所、勞働者と云ふものは小兒があつては仕事が出來ませぬので、小兒を極廉い口錢で以て預けます、縦令ば一日働く賃銀の五分の一とか、或は十分の一位で子守所に朝早く預けまして晩に仕事を終つてから受取に參るさうで御座いまする、其子守所では預かりますると直に穢い着物を脱がせて、奇麗ではないけれども新らしき垢の着かない清淨清潔の着物に着換へさせて、年齢に依りまして流動物或は固形物の如き食物を與へまして、少しも食物には間然する所がないやうに致して置きまする、其他玩具で御座いまするとか或は遊戯器械とか或は音樂のやうな器械と云ふやうなものが十分ではないが備へてある、さうして其子守をする人と云ふのは其小兒を終日遊ばせ、玩具で御座いまするとか或は遊戯器械とか或は音樂器械とか云ふやうなもので、目で見せましたり耳で聞かせましたり手に持たせたりして終日些しも退屈しないやうに殊に面白く眞に樂しく遊ばせまするのが、其子守する人の名譽として居るさうで御座います、何で其樣なことをするかと云ふと其子守をする人と云ふものは何れも貴婦人方の未亡人がやつて居るさうで御座います、さうして慈善的の事業として組織されて居ると云ふ話で御座います、我日本に於きましては、福島縣の福島に於きまして、數

年前から子守學校の樣なもの丶設がありまする、それは幼稚園と一所になつて居りまして、皆幼稚園の方の教師が兼任致して居ります、さうして是は子守をしながら教授を受ますさうで、其教授の方法と云ふものは甚だ簡單のもので御座いまして、小兒の取扱方、それから子守歌の改良、殊に此子守歌の中には卑しき文句が澤山御座いまするさうで、私は存じませぬけれども、其卑しき文句を高尚で誰れが聞ても差支ないやうに子守歌の文句を改良致して教へるやうになつて居るさうで御座いまする、それは二ケ月か三ケ月で卒業になるさうです、月謝は雇主が拂つて稽古をさせてやるさうで御座いまする、其他の縣に於きましても此子守學校の樣なものが組織されて居るかどうか知りませぬが、私は未だ聞きませぬ、又此東京市内に於きましても、此の如き學校とか稽古所とか云ふものがあるかも知れませぬが私は聞きませぬ、若しありましたら至極結構で御座います、若し果して斯う云ふもの丶設けがなかつたならば、是非共此子守學校と云ふものを東京市内に設立致しまするのが、今日必要欠くべからざる大急の事業であらふと私は考へるのであります、何故左樣かなれば、只今申上げました通り明治三十一年から三十二年迄、此僅か三年の間に私の手に掛りましたもので生命に關係するやうなことが實に四つも御座りました、それ故に此百五十萬も人口の御座いまする東京市の十五區内の中には何十何百人あるか知れませぬ、さうして此保嬰學校と云ふものの性質はどうしても是は慈善的でなければならぬものと思ひます、又此學校と云ふものは是非共男子の事業でなくして婦人の事業に屬すべきものと私は考へます、斯の如く慈善的事業然も婦人の仕事でなければならぬと云ふ事になりますれば、此大日本婦人衛生會に御願を

するより外にはなからふと思ひまする、何故さうかと云ふのに此大日本婦人衛生會と云ふものは婦人の團体と致ましては日本國に比類のない甚だ盛大なる會でありまする、又貴顕の御婦人方ばかりで組織されて居りまして、其熱心と云ふものは實に非常なものので、さうして其勢力と云ふものは實に旭の昇る如く益々盛隆であり、加之ならず其性質を申しまするとにかく確實で實に堅固であると存じます、それ故に此の如く確實で此の如く盛大の此婦人衛生會の會員皆様方が、非常な御奮發で非常な御熱心で、非常の御盡力を以て此東京市に住んで居りまする數十万の児童の災難を豫防するが爲に、子守學校を設立して頂きたいと思へます、それ故に此保嬰學校を設立する事に就ては私は三拜九拜して御願をする次第で御座いまする、

終りに望んで保嬰學校の設立に就きましては聊か自分の考へを申上げて置きたいと思ひまする、此東京市内には皆様御承知の通り幼稚園が一區の中に二つか三つ、一つもないと云ふ區はないと存じまする、其幼稚園の中に此保嬰學校或は子守所と云ふものを設立致しまして、其教授法と云ふものは極く簡單にする、子守になると云ふやうのものは皆充分の教育が出來ないもので御座いまするから、簡單なる理學とか化學の極くの大要位ひ、それから生理と衛生位ひの事を一寸入れまして、さうして主に小兒の取扱方と、それから子守歌の改良と云ふやうなことを話の樣に教へて、一日一時間とか二時間位ひ教へ、初は六ヶ月位ひの卒業で、段々に進歩するに從つて一年位ひの年限にして、さうして入學の志願者に向つては、是から子守になると云ふ者と、それから現在今子守を勤めて居りまする者とを入學せしめ、一緒に合併して教授をするやうに最初は致しまする方

が適當であらふと存じまする、さうして此保嬰學校を卒業致したなれば、廣く世の中の人の需用に應じまするやうに致したならば宜からう、それには茲に好い例が御座います、縱令ば明治二十一二年の頃慈惠院で以て看病婦を初めて養成して世間の需用に應しさせました、所が其時には赤十字社では未だ派出させませぬ、他の看病婦會と云ふものも御座いませんで、それが一ヶ所で御座いましたが、其後年月の經過するに從つて段々看病婦會が一區に二ヶ所も三ヶ所も出來るやうに今日では大層多くなつて世人の需用も從て非常に多くなりました其看病婦に一等二等三等と云ふやうに熟練した者と不熟練の者とに依つて等級を立てゝありまする、さう云ふ樣の風に保嬰學校の卒業生も、矢張熟練の程度に從て一等とか、或は二等とか三等とかに區別を立てゝ、さうして雇主の需に應ずると云ふ樣に致しましたならば、初はどうか知れませぬが段々世の中の人が是は結構の事と云ふことを頭の中に入れ、一犬吠へて万犬傳ふと云ふ理由で段々多くなつて參らうと思ひまする、多くなりましたならば子守學校を卒業しないものは誰も子守に使はない樣になつて來るだらうと思ひまする、東京市中の人がさう思ふ樣になつて參ることも左して遠くはあるまいと存じまする、どうか此保嬰學校の初めは極く簡單で宜う御座いまするから、若し保嬰學校の創立が未だ東京に無いと云ふならば、速に御創立なされんことを偏に御願ひ致しまする、



婿撰みの法一名精神衛生學の基礎

醫學士　柳　保三郎君述
同　速記事務所員速記

此處に書いてございます通り婿撰みの法一名精神衛生學の基礎と云ふことに就て諸姉の清聽を煩はさうと思ひます、併て今日私は殊更婿——婿殿と云ふことを申します、一体是は私が述べませうと思ふことは、男子の方にも同じく適應することが出來るだらうと思ひます、併しながら本會は貴婦人諸姉から成立つて居られる會でありますから、どうも婿撰びと申す方が先づ適當と私は考へます、デ殊更婿撰みと云ふ字を用ゐましたが、實際能く御注意下さるならば、是は決して婿のみならず若し是が男子であつたならば嫁の撰み方も又同じ事になつて居るだらうと思ひます、私は兎に角斯う書きましたが御聽取下さるには廣い意味で配偶撰みと云ふやうな意味で御聞きにならんことを希望致します、

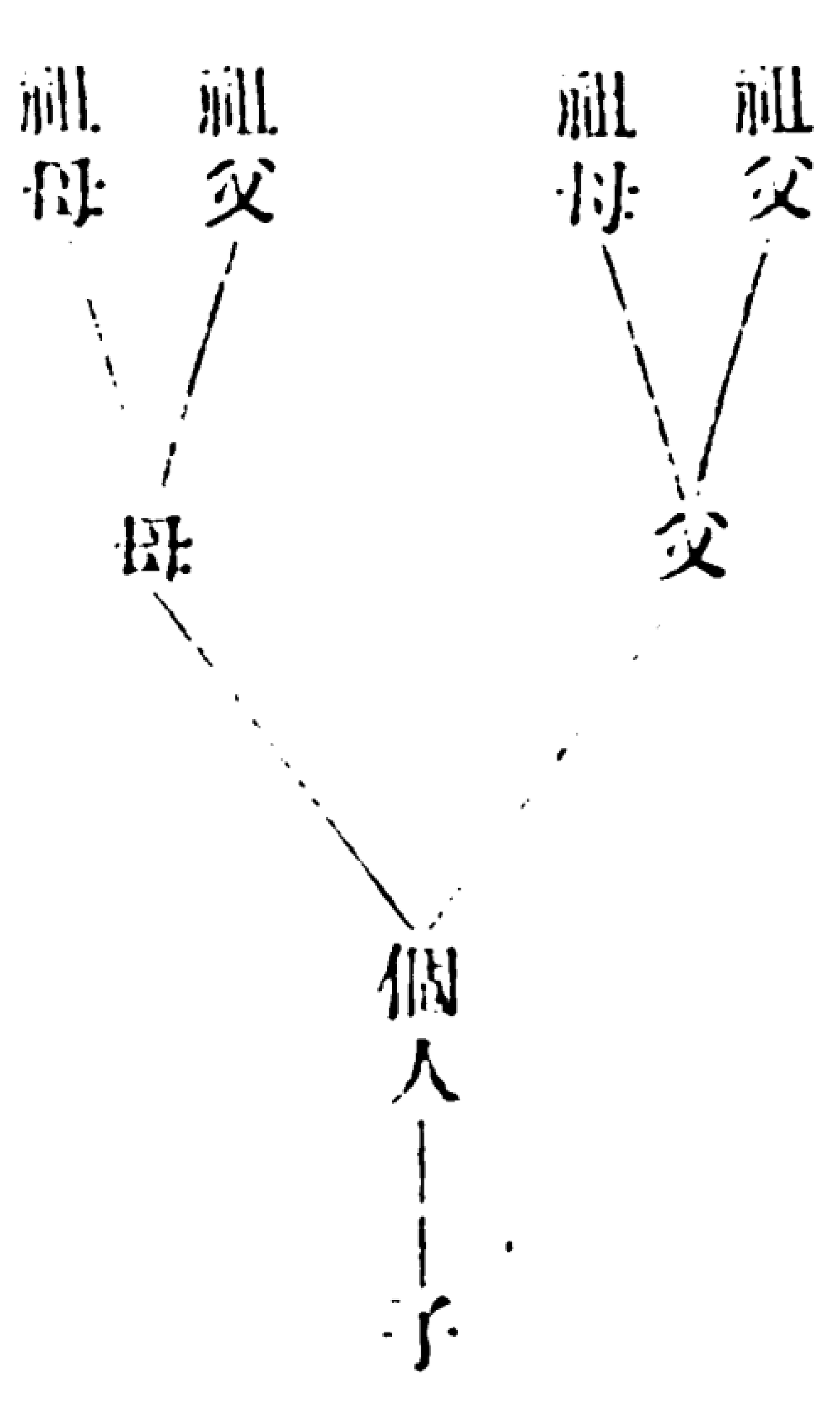
デ今日御話する前に御斷り致して置かなければならんことは、婿撰みと言ゐますと、何やら色々今迄の習慣もございまして、尚も配偶を撰みますに當つては第一に容貌を注意すること、第二には身分、又は財產に大變注意致します、さう云ふ事は私共が敢て此處で清聽を煩すことはないと思ひます、デ私は唯單に自分が是で生活して所謂米を食べて居る專門で、其の方の注意を聊か御參考までに申上げやうと思ひます、デ肩書きの如く醫學士と書いてございますから、醫學には相違ない、又本會も衛生のことでございますから、矢張り是も所謂法律的の配偶と云ふやうなことは論外であらうと思ひます、デ然らば私が今日此の婿撰と云ふことに就て申上げることは、單に醫學上のことでありますと云ふことをどうぞ先づ御考へ下されまして御清聽を願ひます、今一

つ進んで申上げなければならんことは、私は元來精神病即ちヒラの言葉で云へば瘋癲の方の專門でございますからして、どうも外のことは余程智識が足りませぬ——けれども精神病には大智識があると云ふのでもないが、兎に角此精神病の側から幾分かの御參考までに申上げたいと云ふ、斯う云ふ考へで御話致すのでございます、

デ先づ御斷りは此位に措きまして本問題に取掛ります、凡そ人間は一定の青年に至れば先づ配偶を撰んで、其子孫の爲め一つの契約、一對の　少し困りましたが　夫婦を形づくらねばならんと思ひます、併ながら其青年の時代と云ふのは凡そドノ位であらうかと云ふと、日本の民法には委しいことがある又西洋でも委しい事がある、凡そ男子は二十歳以上で女子の方であると十八年乃至十七年位の所が婚を取りお嫁になる時代であらうと思ひます、デ此時代になりますと、天然は誠に好くしたもの、私共の經驗に依りまするど云ふと隨分美しい令孃方が目に着きます、甚だ申惡いことでありますが是は眞實の所でございます、アありまするからそれは天然の然らしむる所で、そこで是れなら宜いと云ふ決心が出て、それから遂に結婚を申込むと云ふやうなことでありますが、其邊は先づ委しく私は申すことは出來ませぬ、それで段々此世の中が進むに從つて、少し話が別になりますが大分精神病が多くなります、是は外國の統計表などで分つた話でありますけれども、どうも文明國と稱せらるヽ英吉利獨逸邊りに於ては、先づ平均三百人の中一人は精神病者が出ると云ふことを學者が言つて居られます、然らば其數は非常なものであらうと思ひます、で年々歳々斯の如く病人が出來まして、又病人でない一種妙な變挺な人、偏屈であるとか、或は又怒り易いとか、直ぐに

精神が疲れ易いとか色々な精神病を見たやうな者が幾つも出る、さうしたならば無論三百人に一人では濟まない、段々世の進むに連れて二百人に一人位になるか知れませぬ、さう云ふやうな次第でございますから精神病の衛生と單に書いてございますが、此精神病の衛生、即ち吾々の精神の衛生と云ふものが段々進まなければ到底此の憫れなる有様を救ふことが出來ませんでございます、其憐れなる有様、随分狂人が澤山に出て來る、それを推して往けば此一ヶ國の者が皆瘋癲病になれば到底國を保つことは出來ません、さうして見れば精神の衛生と云ふ感じは益々高まつて來る、精神の衛生は殆ど缺くべからざることゝ思ひます、然らば精神病はどう云ふ所から起つて來るか、又精神の變狀、所謂一口に言へば氣違染た人間はどうも醫者の方の厄介にならなければならんと思ひますが、其精神の變狀と云ふのは如何なる原因から來るかと云ふことを、先づ一通り此處で申上げて、それから段々に此[illegible][illegible]みと云ふことを申上げないと順序が惡うございますから、暫くの間精神病の出來る所の原因を掻摘んで申上げやうと思ひます、

それで其原因、單に申せば其原因の大部分を占めて居るのは遺傳であります、其遺傳と云ふものは父母或は祖先からして得た所の一種の惡い病氣が段々子孫に傳はると云ふことを意味して居るのであります、



デ私が此處に掲げました一個人と云ふのは、先づ病

人と假定すると、それが父方の父母祖父なり祖母なり、又母方の祖父なり祖母なりがある、そこで茲に一人の精神に異狀を來した者があると云ふ場合には、遡つて吾々が此精神病を探ると云ふと何處にか一ツの遺傳があります、無論遺傳も何もなくして精神病を發する場合も澤山あります、けれどもそれは別問題として、縱し遺傳のないのは罹つても極く輕い所の精神病であります、然る所重い精神病に罹ると云ふ人は遺傳の澤山ある人に限つて居ります、それで今此一個人が病人であると見做したならば、其祖先に何か精神病の原因となるべき人があつたに違ひないと云ふことは吾々が直ぐに考へなければならん、倂て其精神病の原因となるべき條目はどう云ふものであるか、精神病の原因として數へ舉げられるものはとうかと云ひますると、此處で申せば皆さんが驚きになるだらうと思ひます、第一に吾々が——

吾々醫者が讐敵と見做して居るのはアルコール、即ち酒の類ひであります、アルコールを盛に飲み又年中醉續けに醉つて——稀に少し位の飲むのは一向差支へございませんが、年中醉續けに醉ひ、又非常の大酒であつてさうして一時に非常に飲む場合には、自身に吾々が生き居る中樞の神經に大害を及ぼすのであります、即ちアルコールの毒、酒の毒、それからして第二には貴婦人の前では言ふことを憚かることでありますが、殿下の御前の恐れをも顧みず申しますが梅毒であります、此梅毒は獨り自分の身體に害を及ぼすのみならず、進んで子孫にまで大害を及ぼすものであります、梅毒の子供には多くは流產、或は其他の病氣で以て早く死にます、先づ醫者の方から申せば幸ひなることで、若し不幸にして生き永らえて居れば其子供は惡い精神病に罹るのであります、デ先づ此梅毒は余程非常なる所の毒を以て病氣

を起すと云ふことを申上げます、第三には現今の教育が段々進んで居つて、一ツの學校で修めても足りない、又其次ぎ〳〵と澤山に教育を一時に教へると云ふので、即ち吾々の教育の過度で、始終學校のことに逐はれなければならん、又學校へ出て其爲に勉強しなければならんと云ふので、教育の過重なる所より始終心を勞さなければならん、年中心を勞すると云ふことが即ち精神病の極く輕度の神經衰弱と云ふものを起し易い、其神經衰弱と云ふのは後で申上げまするが、是も遺傳の一ツであります、ヂ全く遺傳のない健全の人でございましても、其人が身分不相應な勉強を致せば神經衰弱になる、其人の子孫が又精神病の遺傳を貽される、それで其外又學校のことは措きまして第四には社會が――段々世の中が末になり、世の中が段々辛くなつて參りまして一定の安心をして暮して行くことが出來なくなつて來る、尋常一途の勉強では自分が退歩する傾きになる、それで社會に對して生存競爭と云ふ一種の――自分が生き永らへて居るには非常なる生存競爭しなければならんのであります、それも亦精神を餘り過度に疲らす爲に一ツの精神の病氣を起します、是が其人一代に精神病に罹るべき遺傳を貽すの機會であります、

然して吾々の今迄に祖先がありまして、祖先の中に精神病であるとか、或は又神經病とかヒステリーであるとか、或は神經衰弱の如き一種分らない病氣がございますとか、それ等も總ての神經病の内に這入つて居りますが、其神經病があつたならば、其子孫に於ても遺傳を貽すと云ふことは醫者の方で研究した話であります、ヂ其次ぎには――第一には祖先の精神病、第二には神經病、第三には一種妙な腹立ち易い頑固であるとか或は又非常な吝坊であるとか、

詰り吾々の此普通の精神からして幾らか違つて居ると云ふ祖先があつたならば、其らも矢張り精神病の遺傳を胎すべき病氣の中に數へてあります、是だけは凡そ我が前に申した四箇條、後に申した此三箇條は悉く精神病の遺傳を胎すべきものでありまするど云ふことを申上げて置かなければならん、例へば此處に一人の者がございまして、其父又は母、或は何方かの祖父母の中に何か怒り易いとか、或は酒飲みであつたとか云ふ場合には、其一個人に對する遺傳は則ち是であると云ふことを斷定が出來るのでございます、其妻即ち母に當る人は所謂機嫌換で怒り易いとか、或は偏屈な人間であつたら、其子供はモウ逃れられない正しく遺傳を受けたる者と吾々は見て居ります、此處に面白い例がございます、一寸申上げまするが、是は私が巣鴨病院で取つた所の例であります、一人病人がございます、其母親は半面痛を病んで居る、母方の叔母は癲癇病である、それから又母方の祖父即ちおぢいさんは大酒家で其妻の方は老耄して仕舞つて分らない、父方の方で言ふと、其父は無闇に癇癪持であつた、其父方の叔父さんも癇癪持であつて、それから其祖父さんは又癇癪持である、其病人は極く癒り惡い所の一種の精神病に罹つて居る、而して其兄弟はどうであるかと云ふと、今の甚しき所の遺傳を稟けて居つて、其總領が大變な癇癪持、次男は今の病人でございまして、妹は自殺して仕舞つた、其次の弟が氣病をする性質で、其次の弟が癇癪持である、一番末が先づ健全でございました、さう云ふ風な例は最も吾々が興味を以て集めた所の例でありますが斯の如く遺傳と云ふものは精神病を起す所の原因になるのであります、無論先程申した通り遺傳がなくても精神病は起ります、それは自分が精神を除り使ひましたとか云ふ場合に起

ります、併しそれは一寸のことで癒ります、是に大變に容易い所の病氣として數へられますが、一番恐ろしいのは即ち遺傳であります、

偖て遺傳と云ふことが、今日申上げまする所の婚撰みのことに就て餘程關係を有つて居るものでございます、遺傳と云ふことは今申しました如く、吾々の配偶を撰ぶ場合に於てどう云ふことをしたら良いかと云ひまするに、是は今申した通り遺傳が一番恐ろしいから遺傳を避けなければならん、斯う云ふ論になつて參ります、然らば遺傳のある人は配偶が出來ないかと云ふことは、私が是から段々申上げまするが、それは決してさうでない、さう失望したものでもない、遺傳と云ふことが吾々の祖先からして傳つて來た時に於ては、吾々は如何なる方法を以て之を防ぐかと云ふ所の問題に取掛ります、段々にそれから婚撰みのことに移ります、

如何なる方法を以て之を防ぐかと云へば、第一に吾々が注意しなければならんことは、祖先に一種の病氣があつたならば、之に戰かうには教育であります、吾人は幸ひに正當の善き所の教育を受けて、さうして其教育の眞味を知り、進んで自分が生活し得る時に最も容易く此世を經營することが出來たならば是が一番の兵器であります、それが一番宜いので、第二には所謂婚撰びの即ち配偶を撰ぶことであります、己れに一ッの遺傳があつたならば、其遺傳を防ぐには即ち後來子孫が繁昌し益々繁榮なさしめんがために配偶の撰び方を餘程注意しなければならん、其二ヶ條を守つて戰つたならば、その遺傳は何んのその、一向何でもない話である、其中で以て今申した教育と云ふものを先づ一番先にやつて、即ち自分が十分に注意すれば出來ることであります、次の配偶撰び、是が甚だ六ヶ敷いことであります、所謂長

し短かしである、併ながら撰ぶと云ふことに就て教育の方は姑く措いて幾らか御參考までに是から婿撰みのことを申上げます、今申した通り婿撰みと云ふことは財産も考へなければならん、年の廻りも考へなければならんし、容貌も考へなければならん、けれど其等は敢て私が喙を出さない、私が口を出したいのはタッタ一ケ條しかございません、即ち其遺傳と云ふことは能く注意なさる、それからして注意をなさるゝにも少々位、精神病の遺傳があつても、其人が確固たる精神を持ち、又十分なる教育のある人ならば先づ宜敷かろうと思ひますが、然し遺傳なき人は一般確て斯う云ふ例が此處にあります、今申しました所の例の中に兄弟悉く變挺な、怒りッぽかつたり自殺したりする精神病者、而して其中の一番末の弟が健全に近い、斯う云ふ場合であつたならば其人は先づ遺傳を輕度に受けて居るのであります、

然らば吾々斯うやつて澤山の遺傳があると云ふ中に、遺傳に漏れたる人があります、兩親とも遺傳を有して居り、遺傳と爲すべき條件を備へて居る、其子の中で說明は附きませぬが、遺傳に漏れて居る所の人は所謂健全なる人であります、健全であるからして其人は精神病に罹らずに通つて仕舞ひます、デあるからして澤山の精神病の祖先があつても、其人の精神が確固であり高尙なる教育を受けて居れば、先づそれはではあるが幾らか豫防がつきて居る者と思ひますが、其人は能くとも配偶者に遺傳があれば再び危險なる子供を生じます、で第一には確固たる精神を持ち、高尙なる教育を有つて居る人であつて、それで遺傳のないのが一番御求めになる條件だらうかと思ひます、それからして第二には、今度は少し長くなりますか知れませぬが、遺傳は不明なれども其子孫の中に於て性質の如何を顧みて、性質が悪い

とか善いとか云ふことは遺傳がなくとも或は一種習慣で以て來る事があります、教育が惡いとか何とか云ふ惡るい所抔とてありますが、遺傳からして來る所ではありませぬからして、是れは甚だ重き婚撰の條件ではありませんけれども所謂教育を十分した人は、とにかく大に御參考になる一ッで、それであるから私が教育に重きを措く所はそこであるので、其他注意することをモウ一遍繰返して云へば、即ち配偶を撰ぶと云ふことでありますデ配偶を撰ぶに當つては如何なることを注意するかと云へば、遺傳を注意すると云ふこと、其他必要なる事は第二、己れより性質の異なつて居る者を選ぶと云ふこと、自分が極く氣の勝つた者であれば極く靜かの婿さんを撰ぶと云ふことが必要である、若し嫁さんの方が極く穏かの人であれば極く活潑なる所の婿さんを撰ぶが宜しい、是は理屈のある話であります、即ち勝氣は己に一種の精神的性質變化ですから是れと反對の血統を入るのが必要です、混合して新らしい血を拵へることが大變必要であります、極端の性質を平均するとです、是は實驗を致しました上で、又た一説には人間は猿が祖先でありまして、猿や獸類の實驗並に人間を加へて實驗しました所が、一種の異つた――人種で言へば歐羅巴とか亞弗利加とか――マアさう云ふ事は論外でございまして、此の他の人種と結婚する事はまだ不明の問題ですが、極く異つたる國又たは郷里の者の血統を入れると云ふことが大變に必要と云ふことは既に學者が論じて居ることであります、然れども甚だしく遺傳を受けて居る人なれば不可です、即ち之を婚撰みの法に用ゐる、第三には血族結婚は吾々に取つて大に不利益なるものである、血族結婚の不利益なることは吾々が深く信じて居ることでございます、夫れは前の論から釋いて往

つても分かる話であります、斯の如く色々の叔父叔母等は皆自分の血が繋がつて居るのでございます、其血の繫がつたる所から見ますると、其祖先の中に一人遺傳があつたならば、同じく其配偶となるべき人は遺傳を得るのであります、だからしてタッタ一人の遺傳があつても兩方に遺傳が掛つて來るのであります、其遺傳は集合遺傳と稱へて最も癒り難い恐ろしい所の病氣になるのでございます、それでありますから血族結婚は大變に吾々人類に於ては不利益なることであります、即ち今申した三個條は最も吾々が注意して取らなければならんことであります、又皆樣も注意しなければならん所であります、デ未だ申したいことは澤山ございますが、余り長く訥辯で申上げました所が一向初つたことでございませぬ、既に要領は盡してございますから其で今日は終ひます、私の如き不才の者が宮樣妃殿下を御始めとし貴婦人諸姉から成立つた所の、此盛なる會に於て一場の演説を爲すことを得ましたのは、私に取りまして非常なる光榮と存じます、

寄書

○齒の養生法に就て

贊成員　關　善　重　郎君

一般社會の人々は通常衛生を重んじ且つ又之れが注意をなさんとするに當り空氣、飲食物及家屋、土地等の善惡を固執して自分の全身に及ぼす食物の咀嚼作用をなす生活の入門なる齒の健否如何なること等は殆んど輕ろんじ居り少しも顧みざる者多し然れども齒の健全にあらざるものは詰り食物咀嚼の不完全に由り消化器を害し夫れより種々の病氣を惹き起し

遂いには其貴重なる生命を救ふこと能はざるが如き危篤に陥り甚しく至難する者多し誠に憐むべき次第なり、故に予は前号の雜誌にも齒は身躰の關門にして人身に於ける効用はまことに大いなる者なるとと其れが衛生法を重んずべきとを掲載せしが尚茲には毎日何人と云へとも欠くべからざる齒の清潔法に就て其の概略を記述せんと欲す

偖日々齒を磨くとは齒の衛生法中欠くべからざる最も重大なる必要に屬し居れり若し何人に限らず常に其れが注意を用ゐて齒面及齒の間に狭まれ又は附着せる食物例へば肉の砕片が重さなりたる故粘液を出し居る者を掃除するにあらざれば直ちに口内に於て醗酵して五六種の酸類を發生することあるべし而して其酸類は常に新生躰にして烈しく齒質を崩壊して漸次に齒層を敗壊するに至るべし之れに伴ふて尚ほ一層恐るべき患害は既に前にも述ぶるが如く顕微鏡下に照して之れが検査をなすにあらざれば明かに知ると能はざる有機物即ち黴菌を寄生せしむるにあり豈恐れざるべけんや

此く黴菌の存在するとは益々口中の不潔より生ずる所の醗酵及腐敗を補助して時には飲食物中に混和して胃の腑及腸等の消化器中に侵入して其胃腸部に障害を醸し之れが原因となりて種々の病氣を惹き起し醫士の手當も其の効なく遂いには生命をも損ふもの屢々あり或は吸入せる空氣を不潔ならしめ呼吸器等の粘膜を刺戟し其他呼息氣に耻へ難き臭氣を放ち與へて周圍の人々に苦惱せしめ且つ嫌ひを受く之れを豫防するには實に口内の清潔法即ち齒を磨き且又口中の掃除法をなすは尤も必要のとにしに其の効用も亦至つて大なるべし殊に時々に懇切なる齒科醫の診察を受けて齒石あれば之れを取り除き齲齒あれば適當なる充填法を施さゞるべからず若し又齒の健康躰

に回復するが如き目的なる者は之れを抜き去る等の處置を乞ふは各自皆な此注意を要するを最も宜しとす

然れども從來の齒を磨く等のヿは齒質を傷害するの恐れあるを以て却つて大抵は其の宜しきを得ずして殆んど傷害すること多し今こゝには齒の磨き方法に就て大略中の大略を述べんとす

即ち齒刷子を以て齒の前面のみを磨擦するは之れ普通何人もなし居ることにして至つて不滿足の齒の磨き方法たるを免れず之れが大いに吾人の憾ずべき所なり何となれば刷掃は只だ前面のみに止まらず食物を咀嚼する面及び齒の後面をも清潔ならしめざるべからず就中各齒と各齒との間をも刷掃するは最も緊要のことにして齒の欠損は通常重もに其の間隙より始まり前面より始まること　甚だ稀なればなり故に其間隙を刷滌するには齒磨き　子の用法最も必要なりとす即ち刷子を齒齦より咀嚼面に向け又上顎に在りては刷子を下に向け下顎に在りては刷子を上に向け而して一日二回宛即ち朝一回夜一回磨くを肝要とす始めて此掃除法を試むるときは必ず運用の拙劣を覺ゆべきも其の習慣を作らば忽ち巧捷の域に達するや必せり而して齒磨き刷子の刷毛は硬ならず柔ならずして能く其中位を得たる者を撰び用ゐるを宜しとす何となれば硬に過ぐれば齒齦を傷ひ柔に過ぐれば滿足に汚物の附着せる者を掃除すること能はざるの患あるが故なり其の刷子の使用後はよく洗滌し且つ手巾を以て之れを拭ひ其頭を吊垂して充分清潔に保存せざるべからず是れ使用后二十四時間内に於て黴菌を發生するが如き恐れあればなり要するに刷子は強暴に使用せずして水平の方向よりも鉛直の方向に運用するときは能く齒に附着せる垢を除き去り且つ刷子使用の爲めに齒質を磨耗するの患ひを防ぎ

長く歯牙を保存して六十才及七十才の高老に至るまで健全にして脱け落ちず之れを使用するとを得べし其他吾人が毎日必要の口内養生法をなす所の含嗽のこと及び歯磨き粉の性質鑑別法等は極めて了解し易きを旨とし次回の雜誌に掲載して歯の養生法に就てと云ふ論題の局を結ばんと欲す



衛生叢談

○酒精と傳染病との關係

在大學院　Dr.　T.　S.

酒精即とアルコールは勿論、之れをふくんでをる飲料即ち酒が、人間の躰に利益であるが、或は有害であるかと云ふ事は、既に久しき以前から醫學上の問題となつて居るのである、勿論大酒の害ある事は素人と雖も充分承知して居るので有るが、小量の酒を日々用ふるのは、反て躰の爲めに利益で有るとの説を持つて居る論者もある、此の説は醫者よりもむしろ素人に大に受のよい説であつて、本來酒を好まぬ人までが、養生の爲めなりと稱して、小量の酒を晩杓に用ふる人があり然し果して此の説の如く酒が衛生上必要の者であるかは、尙ほ疑ひを存すべき事である、現に近頃或る西洋の學者のなした實驗によると、少くとも酒即ちアルコールを含む飲料は、傳染病に對する低抗力を弱くするものらしくある、今さづと其の實驗を話せば、此の學者は、犬だの鳩だの鼠だの、兎だのの如き數種の動物に稀くしたアルコールを飲ませて置ひて、之れに傳染病の黴菌を植たのである、又一方には此等の動物に同黴菌を植て置て后、日々少量の稀釋のアルコールを飲せて置て、其の經過をしらべたのである、其の結果によると、ど

うしても豫めアルコールを飲せ付て置た動物も亦傳染病を移してから后にアルコールを飲せた動物も共に、少しもアルコールを用ひなかつた動物から見ると、犬に傳染病に對する低抵力が弱いと云ふ事を發見したのである、勿論之れは人間に就て行た實驗では無ひが、既に如斯實驗のある以上は、人間と雖も常にアルコール分を用ひて居ると、傳染病に對する低抗力を弱くなるらしく思れる、故に傳染病を恐れらるゝ人々はあらかじめ晩酌などを廢する方が安全だらうと思ふ、

兩親の健固と小兒の健固との關係

兩親が丈夫であれば生れる小供も丈夫である、之れに反して弱き兩親の兒は同じく弱く、加之に屡々死んで生れると云ふ事は、世人のよく知て居る所である、近頃獨乙のルブビンと云ふ人が報告して居る所を見ると、愈々此の事が確であると云ふ事がわかる、又生れる兒の丈夫であるのには、兩親の中でも殊に男親が丈夫である事が必要であると、云ふ事が明かになつたのである、今氏の報告の大體を此所に御話ししようと思ふ

氏は此の二十五年此の方、プロシヤ國で生れた小兒の統計をしらべたのである、其の前に一寸と御話しして置かねばならぬ事がある、其れは外では無い、本來プロシヤの住民は、本來のプロシヤ人と他國から漂流して來たユデア人との二種類が有ることである、其の中でユデア人の方は、比較的富でをるから生活も樂である、隨て衛生の事にも充分手が廻るから、概して躰が健固である、勿論此の外にも人種上の關係もあるならむが、そこでルブビン氏は先づ次の如き順序で調たのである、先づユデア人の夫婦中に出來た小兒と、プロシヤ人の夫婦の間に出來た小

見とては、どちらが弱いか、即ちどちらが死んで生れるのが多かを調べたのである、するとユデア人の方では、躰の健固なユデア人の方では、死んで生れた小兒が此の二十五年間に千人に付て三二、〇七であるのに、プロシヤ人の方では三五、八八である、之れで見ると健固な兩親の間の兒には死んで生れるのが遙に少ひ事が明かである、次に男がプロシヤ人で女がユデア人の夫婦の中に生れた兒では死んで生れたのが千人に付き三五、七六で、次に男がユデア人で女がプロシヤ人の夫婦の中に生れた兒では死んで生れたのが千人に付き三三、一七である、此の統計で見ると丈夫なユデア人とプロシヤ人との間の兒は、プロシヤ人夫婦の兒から見ると遙に健固である事が明かである、其の中でも男親がユデア人である時は、男親がプロシヤ人である時よりは、遙に丈夫な事が分る、

以上の事を云ひ換へて見ると、丈夫な夫婦の間の小兒が最も丈夫である、次に丈夫な父親の兒が丈夫である、其の次は丈夫な母親の兒で、最も弱ひのは弱き夫婦の間に出來た兒である、弱き小兒を持つ親ほど世間に不幸なものはない、夫れが爲めに心配の絶ゆる事なく、一家の平和を破る事が少くない、されば世の父母たるべきものは、共に衛生に注意して、身躰を健固にする事を計らなければならない、殊に男親たるべきものは一層此の點に注意を要するのである、然し夫をして衛生を怠たらぬ樣に監督するのは、之れは妻たるもの丶義務である、

◎乳癌の話

乳癌と云ふ病は至て多い病で、此の爲めに生命を失ふた婦人は實に夥しい事で御座ひますが、幸に近來は醫學が進歩いたしましたから、假介乳癌に罹ましても、早くさへ療治をしますれば、必ず全快いたし

ますから、豫じめ乳癌と云ふ病は如何なる病であるかと云ふ事を知て、もし不幸にして此の病に罹た場合には、速に療治を致さなければなりません、扨て乳癌の源因即ち乳癌はどうして出來るかと云ふ事は今日でもまだよく分りません、然し乳癌に罹た人に聞て見ますと、乳癌の出來るずつと前に、乳を强く打たれたとか、或は乳の上に何にか物がをつこちて來たとか云ふ樣な事を屢々耳にいたします、其から又乳の廻りを常に堅く締めて居る人などにも、乳癌に罹る人が多い樣に見受けますから、此等の事も乳癌の源因となるらしく見へます、其から倘ほ一つ申上げて置き度いのは、乳癌は遺傳をすると云ふ事で御座ひます、乳癌に罹た人の系圖を調べて見ますと其の人の祖母も乳癌に罹た事があり、叔母も亦乳癌に罹た事があると云ふ樣な事を發見致します、或は之れ等の血族のたとゑ乳癌に罹らぬ迄でも、子宮癌だの胃癌だのに罹たと云ふ事も、よくある事實で御座ひます、

夫れから次に乳癌に罹るのは何歳頃が最も多ひかと申しますと、丁度四十才から五十才までの頃、即ち丁度月花が閉ぢる時節が最も多く御座ひます、最も倘ほ若ひ人でも乳癌に罹る人も御座ひますれば、七十才位になつた老人でも乳癌に罹る事が御座ひます最も此の病は女に多ので、男で乳癌に罹るは誠に稀で御座ひます、

扨て乳癌に罹りましても、極初めは自分にも分りません、然し段々大きくなつて參りますと、胸を刺す樣な引張る樣な痛があつて、此の痛が肩の邊まで響きます、此の痛は人によりて强い事も亦極弱い事も御座ひますが、兎角治ては起り又治ては起りますから、遂には何にか胸に病氣があるのではないかと云ふ事を考へる樣になります、此の時に醫者に見て貰ふ

ひますれば乳房の中に堅い塊りがありますから、此の人が乳癌に罹て居ると云ふ事が分るので御座ひます、尤も人によりては、乳癌に罹て居ても少しも痛がなくつて、乳が段々に堅く脹れ上つて來るので初めて驚て醫者のもとにかけつけるのも御座ひます、未だ此の時分に氣が付て醫者の所にかけ付ければ、誠に宜しいので御座ひますが、左も無くて放置して置きますと、段々に脹れ上て參りまして腋の下にグリ／＼が出來て參ります、此のグリ／＼は右の乳が乳癌に罹た塲合には右の腋の下に出來、左の乳が罹た塲合には左の腋の下に出來るのが通常で御座ひますが、時とすると乳癌が右に出來て、グリ／＼が左の腋の下に出來る事も御座ひます、如斯なつても尚放置して置ますと、乳は益々脹れ上り、手で觸れて見ると其の表面が凸凹して居るのが分ります、其れから遂に其の表面がたゞれて來て、皮が裂け、血が流れ、丁度無花菓の割れた時の様な有様となります、之れを尚ほ放置して置きますと、段々に病人が弱て來て、早ければ一年も經ぬ内に、遲くとも二年目位には、生命を取れます、勿論此の時にはグリ／＼は首の廻りにも出來て參ります、

以上はざつと乳癌に罹た人の有様を御話したので乳癌に依てはまだ色々と變たのが御座ひますが、兎角此の病は前にも述べた如く、誠に恐しき病で御座ひますから、其乳癌であると云ふ事を知りましたらば、早速に療治を加へて、生命を救はなければなりません、

扨て乳癌の療治は如何致せば宜しいかと申しますのに、之れは今日の所では外科的に切り取るより外に仕方が御座ひません、勿論切取ると申しましても、今日では外科學が進步して居りますから、左程御心配には及びません、極く初めの内ならば、コロヽホ

ルムの様な痲酔薬をかけませんでも、局所痲酔（前號を見よ）を用ひれば療治が出來ます、唯此所に私しが特に申上げて置たいのは、乳癌は早く療治を加へれは愈々其の成蹟がよいと云ふ事で御座ひます、極く期初で未だ腋の下にグリ／＼の出來ぬ内に療治致しますれば、全治は受合で御座ひます、又たとへ腋の下にグリ／＼が出來ましてからでも、醫者が上手で充分切取る事が出來ますれば、必ず治りますから、不幸にして此の病に罹た方々は一刻も躊躇せず外科醫の治療を御受けにならなければなりません、勿論醫者は上手な分科醫でなければならぬ事は、申すまでもない事で御座います、

○病的の現象（前號の續き）

（十二）食物を取る事の變化するのは、色々御座ひますが、先づ第一に物を飲み込む時に痛を感じますのは、首に病のあるときや、口の中や喉などに手術を施した后や、口の中の荒れた時などに見る所で御座ひます、第二に物を飲み込む事の全く出來なくなるのは、之れは食道がだん／＼と細くなつてきたしるしであります、第三に物が食べたく無いの即ち食欲の減じるのは、胃病の人や、熱のある人などに見る所で御座ひます、又精神病の人は屢々食物を取る事をいなむ事が、御座います之れに反して食欲の大に進むのは、糖尿病と云ふて尿に砂糖の出る病に罹つてる居る人や、重き熱病に罹つて居た人の治りぎはなどに見る所で御座ひます、次に大に咽喉の乾くのは、熱のある人や、血を失た人や、糖尿病の人などに見る所で御座ひます、

（十三）消化や便通の變化するのは、色々御座いますが、先づ第一にたべた物を吐くのけ胃病の人や、腦や腎臓に病のある人や、モルヒネやコロ、ホルムな

どの類を瀉出用ひた后や、丹毒だの猩紅熱などを病でをる人や、腹が閉る病氣の人などに見る所で御座ひます、亦小兒が乳を吐くのも之れに屬します、次に腸痛即ち腸の痛のは、惡き食物を喰べた后や、毒を飲んだ后などに見る處で御座ひます、又食事の后に常に腸の痛むのは之れは胃の惡しきしるして御座ひます、又大便を致します前后に常に腸の痛みますのは、之れは腸の惡きしるして御座います、次に腹痛が有て、やつと治るかと思ば直に又起り、又直るかと思へば又直ぐ起ると云ふ具合に、一定の時間を置て腹痛があるのは、之れは肝臟や腎臟などに石の出來たしるしで御座ひます、又胃だの腸などの閉鎖した時にもこうゆう事が御座ひます、便通の度數が多いのは下痢をした時に見る事で御座ひます、之れに反して度數の少いのは便秘と申します、又腹が閉鎖します病氣では通便が全くなくなります、次に出ました大便の形も色々御座ひます、極く固いのもあれば水の樣にやはらかいのも御座ひます、又大便の色は病氣になりますと色々に變化いたしまして、黄疸を病む人にては灰白色となり、甘汞と云ふ藥を飲んだ后では綠色になり、鐵の混した藥を飲んだ后や腸から血の出た后なぞは黑くなります、又チフス患者の大便はゑん豆のソップの樣に黄く、赤痢患者の大便はくづ湯の樣でわります、其の外又大便の中には膿が交たり、血が交たり、虫が居つたり、其の外又色々なものが交てをる事が御座ひます、

（十四）尿の出方の變化するのは、膀胱に病のある人では、小便をいたします度每に痛があつて、且つ其の小便の出る度數が多く御座ひます、又熱の高ひ病人や知覺を失つて居る人や、神經の痲痺して居る人などでは、放尿の度數が大に減じます、此の場合には、ガテーテルと云ふ器械で尿を取てやらなければ

なりません、次に尿の全く出なくなるのは尿道と申しまして、小便の出る道が、ふさがる病の人に見る所で御座ひまして、之れは早速療治をいたしませんと遂には生命を失ふ事が御座ひます、次に思はず小便をもらしますのは、老人や小供に屢々見る所で御座ひます、又神經の痲痺して居る人や、膀胱に傷をしてをる人などにも見る事が御座ひます、次に尿の出る量が非常に増しますのは、糖尿病に罹た人のしるしで御座ひまして甚しき場合には一晝夜に二升から三升も出る事が御座ひます、之れに反して尿の出る量が減じますのは、熱病の人や、腎臓病の人や尿道のつまつた人などに見る所で御座ひます、其外又病氣によりますと、尿の中に血や膿や蛋白質や砂糖や砂や石などが混じて出る事が御座ひます、尿の色も亦變化いたしまして褐色になつたり赤くなつたりする事が御座ひます、

（十五）身躰の運動の變化するのは其の部分に痛のある時には、其の爲めに身躰を動す事が出來ません、又關節の病で關節が固定した時や、神經が痲痺した時などは、動かそうと思ふても動きません、又寒冷の爲めに凍えて手足の動ないのも同じ事で御座ひます、又病氣によりましては、自分は動かそうと思はないのに、身躰が色々の運動をいたす事が御座ひます、



看護法

普通看護法（前號の續き）（第十二）

在大學院　Dr. T. S

●とこずれ（蓐瘡）の事

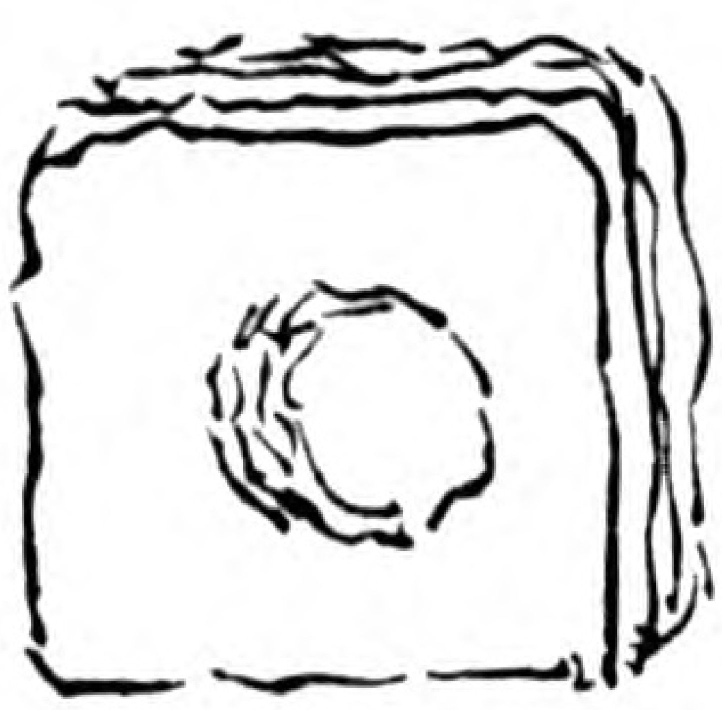
永く蓐に就て居る病人には、兎角とこずれが出來易

いものてあります、とこずれと云ふものは誠に痛いものて御座いまして、之が一日出來ますと中々治りません、從つて其の爲に病人が非常に疲勞致しますから、看護をなさる方々に、豫め蓐瘡の出來ぬよう充分注意をなさることが必要であります、又既に蓐瘡が出來たことを發見致しましたらば、速に適當の處置を施して、之を治して仕舞はなければなりません、蓐瘡の出來ますのは、臀、腰、肩、踵などでありまして、其の中でも臀の上の處、丁度薦骨の處が最も蓐瘡のよく出來る處で御座います、つまり蓐瘡の出來ますのは、皮膚が骨と蒲團との間に強く押さるゝからでありますから、蓐瘡を豫防するには、病人の身躰や蒲團を清潔にして、蒲團は可成柔かなのを用ゐ、蒲團の上敷や、病人の寢卷は常に引き延ばして、皺のないようにして置くことが必要で御座います、又身躰を動かすことの出來得る病人であれば可成寢反りをさせて、同じ處が絕へず蒲團について居らぬ樣にするのが宜しう御座います、又瘦せて骨の出て居る病人なれば、豫め空氣蒲團か、或は又綿を



四五枚重ねまして、其の眞中の處を摘み取つて、空氣蒲團に似た樣にしたものを、蓐瘡の出來る處に當てがつて、置くのが宜しう御座います、

蓐瘡の出來初めは、皮膚の上に靑みがゝつた赤斑が出來ます、此の時分にアルコールを綿に浸して、其上を度々拭ふとか、（アルコールの代りにカンフルチン



キを用ゐればなほよし）或は微溫湯に少量の酢を加へたもので拭ふとか、或は新しいレモンの實を二つに切つて、其の切斷面にて摩擦しまして、前に述べ

た様な空氣枕の類を當てがつて、其の部分が直接に蒲團に觸れぬ様にして置きますと、速に治ります、之に反して看護をなさる方が、此の赤斑に氣が付かずに居りますと、數日後には、此の處が膿を持つてくづれて參ります、或は又黑くなつて參ります、こう黑くなつたのを脫疽性褥瘡と申しまして、骨まで腐れ込み、其の爲に患者は屢々生命を失ふことがありますから、誠に恐しきもので御座います、褥瘡が斯の如く重くなりましたれば、速に醫者に見せて處置を仰がなければなりません、若し差當り醫者が間に合はない場合には、五十倍の硼酸水をガーゼに浸して、それで褥瘡の上を柔かに洗つて後ち、ガーゼを絞つて硼酸水を拭ひ取り、其の上に酸化鉛硬膏をリントに延ばして、貼つて置くのが宜しう御座います、硼酸水の代りに鉛糖水を用ゐても宜しう御座います、又空氣枕の代りに、ゴム製の水枕を用ゐれば誠に結構で御座いますが、ドウも之は高價のもので困ります、兎に角空氣枕にせよ水枕にせよ、直接に身幹に付けるのは、宜しう御座いません、此の上に布片を二枚にして、敷いて置くのが宜しう御座います、兎に角褥瘡のくづれて參りましたのは、迚も素人治療では無效でありますから、醫者の指圖を請ふのが一番で御座います、

食物調理法

內外實用料理（第十二）

楢井多滿子

○日用料理

●紫蘇めし

紫蘇に赤紫蘇と青紫蘇との二いろあり、飯に焚くに

は青紫蘇を用ゆべし、其青紫蘇を水にてよく洗ひ、之をはりばりになる迄日に乾し而して後揉んで粉にし飯を焚きて火を引く時に之をかまの中へふり込む也飯は鹽飯にすべし。

○そうだ鰹魚のすりみ

そうだ鰹魚を三枚におろし骨と皮とを取り去り肉を小さく切り擂鉢に入れて好く擂りつぶし水をさしてとろゝを造るよりも少しくかたくゆるめそれに味酒と醤油とをさして又擂りまぜ茗荷の子又はねぎを横にざく／＼切にし之を肉とまぜ而して鍋に湯を煮立たせ充分湯の沸騰したる中へ擂鉢のすりみを一時に入れて鍋のふたをなして煮るなり。しかすれば其すりみは玉子とぢの如くなべに浮びて一杯になるなり前にみりんと醤油をさしたる鹽氣はだしと共につゆに味を付くれ共猶ほ味き時は後にて醤油をさして加減をすべし。そうだ鰹魚は煮付けにする時は常の鰹よりも味ひ一等下品なるものなれどもかく擂身にする時は味ひもよくことに經濟にて凡そ目の下五六寸位ひのそうだにても五六人前以上の菜となる也

○鰹魚の味噌汁

鰹の切身にてもすりみにてもよし、たま葱と白玉とをあしらへにすべし、玉葱は丸の儘をよしとす白玉の粉を常のだんごをつくる如く少々平たくして造る也一碗に切みと玉ねぎをひとつづゝ白玉は二ツ三ツ位ひ香料は柚子か青紫蘇の葉をいるべし

○牛肉の胡麻煮

胡麻五六勺を煎りて擂鉢にてすり其中へ牛肉を大切れのまゝをいれよく胡麻につけ置く凡二三時間而して牛肉を取り出しうすく切りて砂糖醤油にてごま共に煎るべし。なか／＼風味宜敷ものなり

○茄子の生姜酢

茄子の皮をむきゆでてしぼりさんばい酢の中へ擂り

生姜をいれてあへる也

○蝦と枝豆の三杯酢

子蝦或は芝蝦をゆでてむき枝豆も湯でて豆を出し茗荷の子を細びき三杯酢をかけて食すべし

○梨の菓子

梨の皮をむき一へぎ〳〵にそぎ水をひた〳〵に鍋にいれてひと吹煮立て砂糖をてきゝにいれ丁子を香味にいれて形のくづれぬ程に煮るなり而してつゆと共に皿にいれ食後の菓子に供すべし之は洋食、和食、いつれに用ゆるもかなり

魚類調理法

靑魚科に屬する質問に對し大日本私立衛生會の審事員醫學士古川榮氏には同雜誌に之れが答解をなし且調理法に付き詳細に説明せられたり

初めに魚の爲めに酔ふことは如何なる物質によりて發するやは今日迄博士學士の研究せるに拘はらず不明なることにて此經中毒素は魚類凡て共通なるものにて夫の獸肉は皆大同小異の成分を有するが如く魚肉の成分も亦悉く相類するものにて分析上によるも成分には優劣なきものなりとて分析表を擧げて説明せられ次に調理法の項に左の如く記るされたり

（調理法）に就きて答解するは大に困難を感ぜざるを得ず如何となれば特り靑魚科のみならず凡ての魚肉に關するが故に冗長に亘るの嫌あり先づ食用につきて注意すべきは魚の新鮮なる點にあり殊に靑魚科に在て然りとす「鯖の生腐」とは即ち其聲稱なるべし、靑魚科に屬する魚の調理法は其種類、大小等に依りて同一ならざること明かなり、最新鮮を望むも生きたる靑魚科は手にすること難きは魚其性の然らしむる所なり（委しくは問題外に亘るが故に畧す）

俎に上せ、強て直して頭尾は支顧より離るゝものは新鮮なりと知るべし尤も是は大なる魚（マグロ）には適せず

一、鮮肉　全くの鮮肉を刺身　軒肉とす（洗ひには水強直せざるが故に出來す）「ツマ」は陸草海草の配合勝手たるべし醬油は深き紫色にして濃調なるを佳とす（刺身醬油、四國にあり）東京外の地方にては醬油のみならず此に人造酢（酢――五%內外）或は天然酢（橙、木のす）を混ずることあり「マグロ」、「カツヲ」等即ち刺身に適す「チャ」（鹿島）には此類の肉は適せず少しく溫度高ければボク〳〵なりて大に風味を害す、最も脂肪少なき肉を刺身に作りて食用に供すべし、（脊身は刺身、酢物とし腹身は煮燒すべし）之に醋酸（五%內外の販賣酢に氷醋を加へて溶解者は慣用す）を注げば「酢の物」となる又鱠をも作るべし鮓は本篇の末尾に附記すべし

二、鹽燒「マグロ」、「カツヲ」、「ブリ」等は後段に掲ぐる鹽物を燒きて食用に供するを普通とす、鹽鯖鰺ひもの等も等しく後段に掲ぐべし殊に夜光を放つ點に就きては更に一言を費すべし）鹽燒となすは鰺、鯖の類にして殊に鰺は味よきものなり（三島）わた及えらを拔き輕く鹽を撒き焦げぬ樣に鐵弓（魚串、金篦）にて燒くべし、鹹味薄ければ醬油（酢）を適宜に注ぐべし

三、炙燒　てり燒は味を付けたる醬油にて作るを法とす生醬油にて「マグロ」の雉子燒を作るべし、味噌漬肉を燒きて味噌燒とす、醬油漬肉の燒肉も一種の雉子燒なり「サワラ」のてり燒は風味宜しく熱を加ふれば（鹽燒、炙燒）水分を約二十%失ふが故に縮少するは當然なり割烹店にては火通り悪しく〳〵）且つ形の小くなるを嫌ひて）往々半熟なる

ことあり答解者は最も之を不快とす煮肉も亦同じ
故に大たる魚は前以て蒸して鹽燒となすこと鯛に其例を見る

四、煮魚　脂肪多き腹身を煮るも尚且つホクホクの感ありて風味宜しからず小なる鰺、鯖を素燒しアユ、ワカサギ、ハゼの如く煮付るは佳味あり、味噌煮には味噌を加ふ骨軟かとなるとのこと、「サンザシ」は未だ試みず

細挫鮮肉を水煮し或は適宜の食鹽を加へたるをベルツ博士の「マグロスープ」とす、なま臭くなければ婦人抔には適すべし答解者は矢張り從來の牛或は鷄「スープ」を好む

鰹ぶし製造の副産物たる煮とり（鹿島）も嗜好の許す限りは之を稀薄して一種の「スープ」として用ふべし（答解者の鼻舌は牛肉えきす（リーピッヒ）より製したる「スープ」（軍陣にて速製す）を數等優れりと認定す

五、蒲鉾「マグロ」、「ブリ」は形大なるも肉に色あり且つ變敗し易きが故に「サメ」の如く蒲鉾を作ることとなし、今日の味よき蒲鉾は「フグ」を以て製す東京近海には「マフグ」多し此フグは「セツサイ」よりも薄弱し長州には三尺以上のトラフグあり

鮮肉或は酢肉に附記すべきを鮓（壽司、スシ）とす（美濃米）其まゝ用ふべき「マグロ」は脂肪少き作身なるべきも往々腹身にて而もスヂあることあり「マグロ」のコケ或は上等ならざる鮓には「ブリ」も用ふることあり（大黒鮓）松の壽司は「ブリ」にて有名なり與兵衛ズシ並に岡野ズシは小なれども味良きを以て名あり（美濃米に特別に味を付けること夫の大村鮓に同じ廏鮓には酢の代りに酒を注ぐ味甘くして上戸には向くべし）「アヂ」は「コハダ」と共に壽司に用ひらる、大ならざる魚を三枚におろし薄く鹽し石にて輕く押置きて「タネ」とす鹽少く

且つ石鹸くつけおき凡六時間を經て下地となし鬱にて答解者は今より二十年餘前に中毒したることとあり（緩下劑を服用し三時間ばかり睡眠し醒後全く回復せり）此の鯖壓搾肉の酢漬したるは即ち鮓の「ダチ」にして毒を衛く「ツサビ」は其の裡面に潜伏するが故に小兒には注意すべし、「蒿モジ」には「ニギリ」「チラシ」の別あり握り鮓は長徑二寸餘幅徑一寸餘、高徑八分餘を算す（大黒壽司は二割餘大なり）新橋ステーション構上壽屋（キリン、ビーヤホール）にて販賣せる握り鮓は廿日にして價の割合には食すべし（未完）

衛生海

本月の本欄では無病息災富貴長命の術を初めに申し上げましやう此術は是非御實行下さいまし古への書物にもあります通り病已に成りて後之を藥し亂已に成て後之を治め泥棒見て繩を綯うの類は皆はや晩でとて病の時に藥を飲まんよりはふだんによく養生をして病の種を蒔かぬことそよけれ是等の事は皆様の百も二百も御合點でしやうが毎度申す通りよい事は必ず實行するといふ勇氣がなければイクラ理屈を御存じでも知らぬも同様無教育も同じことです兎角世の中は紺屋の白袴で教育ある人はいろ〳〵說を付けなどして爲めに實行力に乏しきやの感がある●善く養生する人は飲食睡眠の注意は勿論常に自から存する抵抗力を強うし病魔をして乘ずるの隙なからしめ始めて無病長命を得ることが出來るのであります●其長命の術は？此法たる人のよく知る所なるも而も實行力に乏しき方法で委しく申せば衣食住から運動の事から中々一朝一夕には述べられませんが其内で尤も効力ある尤も簡易なる養生法と滋養藥料とを申し

ましやうソレハ何に？冷水養生法と肝油服用のことです××××××●皆様はオヤ〳〵との嘆を發せられんが併しよく此二法を實行せらるゝもの婦人にして夫れ幾人か御座いましやう！●上流社會には近頃大分行はるゝ樣ですが兎角嚴寒凜烈の候迄は續かぬ方が多い是れが即ち習慣で今や夏季將に老んとするの候此季を過ては此法をよく勵行することは出來ません冷水法の如き男子は活潑によく行うものが御座いますが兎角婦人は面倒かつて行はぬ者が多い是れは誠に勇氣のないことではありません？冷水法の効驗あることは實に大したもので顏色憔悴し形容枯槁羸弱なる躰軀も身自から之を培養するときは身躰强健精神も快活に躰量も必ず增加して皮膚も爲めに艶麗ならしむるを得べし人或は言はん寒中冷拭法の如き或は事急劇に失し反りて實わらんとの疑を抱かるゝものなしとせんが彼の婀娜たる妙齢の絃妓を御覽んなさい朔風凜冽肌膚爲めに戰慄せんとするを物ともせずして喃々低語して遊客の許に至らんとするを絃妓因と寒を怖れざるにあらず慣習の然らしむる處意に介せざるに至りしなり又普通婦人方のシャツ下穿を用ゐざるか如き乳房を出し嬰兒を哺乳して毫も感冒に罹ることなきも又同一の理なり●其法たる婦人の如きは只每朝冷水を以て全身を淸拭し强く皮膚を摩擦し濕氣を存せざるを要す苟も身躰强壯に皮膚を艶麗ならしめ天然の美を發揮せしめ天壽を全うせんと欲せば宜しく下の一法を併せて實行せらるべきなり◉肝油服用のこと此事は本誌に度々記載せしことなるがソモ肝油の尤も適する病症は結核諸病、瘰癧（腐骨疽、關節炎、皮膚病、眼結膜炎、鼻加答兒症、）貧血症、佝僂病、糖尿病、夜盲症等にして健康なる人の之を永く用ゐるときは終には脂肪の躰內に積りて躰重の增加を來すことなり●純粹の肝油

(大口魚の肝臟より絞り取るが爲めに名く)の他の油類の如く腸胃を害せずして蛋白質の消耗を豫防するの卓効あり●故に肥へたる人は瘦せたる人よりも熱性の諸病には久しく耐へ且快復の期も至て速かとなる●經濟上　脂肪は體溫を保つに尤も必要なるものにて其熱量の多きことは同量の蛋白質に二倍し含水炭素に三倍す●滋養價　一食匙の肝油は一おんす即ち七匁五分に當り滋養價に於て乾燥せる蛋白質凡そ六〇、ぐらむ或は生肉半斤と同等となる●上の如く肝油は滋養に富み居るを以て多少の臭味ありて呑み惡しといへども其價の遙かに廉にして効能の明かなる之に若くものなし●胃弱にて瘦せたる人或は大病後の快復期に用ゐて其體重を增し小兒の腹用せしむれば成長著るし●但し肝油は粗製のものと精製せるものとありて効能も亦大に差違あり提灯持ちにはなけれとも實際醫學博士高橋順太郎氏の改良肝油は他の肝油と異なり記者の實驗によるも不快なる臭味少く薄荷製の芳香味を有し極めて純粹なるものにて普通の肝油と大に異なり●之に「ガード氏」の試檢法を施すに稀き炭酸曹達液を試驗管に入れ僅かの肝油を加へ拇指を以て管口を塞ぎ一回振り搖かすときは佳良の乳劑を生じ久しきを經るも油分の分離を認めず之に反して「オレーフ」油などを以て同一の法を行ふときは一時を經て脂肪の分離して液上に浮ぶを見ても知るを得べし●高橋博士の肝油は東京製劑合資會社(東京下谷下車坂町十三番地)の製造にかゝり價一瓶六十五錢普通下等の肝油は三十七八錢四十錢位なるも其効能と飲用し易き點に至りては實に雲泥の違ひなり●サテ以上述べし冷水法と肝油との二法とは正しく實行せらるれば無病長命疑ひなし●牛乳の事を少し述べましやう牛乳は近頃大分飲用するものもふへた様ですが只牛乳でさへあればよいと云ふ譯

ではない牛乳には毎度申す通り有毒の黴菌のあることもあり乳の薄きより水を混ずるあり其他脂分不正のものもなきにあらずサレバ素人にても驗乳法は知らで叶はぬ事なり●牛乳の最も安全なるものは一旦分離器にかけて塵埃や汚穢物や滓などを顯微鏡で見ますと其中の多くは牛の糞ですナント汚さいではありませんか●夫れでありますから分離器にかけ消毒の爲め七十五度の熱を與へたるものが最も安全であります●牛乳の變敗に傾きし漿概して草食動物の乳汁は常に兩性の反應を呈しますが搾り取りましたばかり新鮮なるものは「リトマス」試驗法にて檢しますに酸性藍色の紙が赤色に變ずるもの若くは「アルカリ」性(赤色を藍色に變ずるもの)でありますが決して強酸性を有するものでありません稍強き酸性あるものは已に變敗に傾きし徴とす●又牛乳の比重を知りますには通常多くケツエンス氏ミユルレル氏の乳稠計を用ゐます此器は比重の他に水を多少加へたかと云ふことを知ることが出來ます●顯微鏡的檢査　中乳一滴を顯微鏡下にて檢査しますに乳球の密接して著しき不同なきものは良乳で不良の乳汁は乳球が粗く離れ居て其大さも亦不同でありますから一目して分ります●一度煮たる乳と生乳とは下の法にて直ちに分ります癒瘡木脂と云ふ藥を「アルコール」に溶したる液を乳の中に混ずるときは乳は藍色となり一回煮たるものは其色變ずることなし●警察にて市中の牛乳を檢し惡しきものは販賣を禁ずる器械は「マルシヤン」氏の乳脂計で此器に牛乳を入れ次に加里滷液二三滴を加へ次に「エーテル」を注き之を五分間程振盪しヨク混和して油狀となりたる處で「アルコール」を加へ再び振盪し攝氏四十度の温湯中に沈むるときは暫時の後其脂肪は油滴として表はるゝに至り脂肪量の多少を檢出することが出來ます

●中乳の中に米の汁を入れたる疑あるものにはヨヂユームチンキ」を加ふるときは直ちに藍色となります簡單なる檢乳器は醫科器械店にあります就て購入せらるべし

中外彙報

●アセチリン瓦斯　此瓦斯は近時座敷用自轉車用等に用ふれども攝氏高度の熱に於て分離し一平方吋に三十ポンドの壓力を與ふるときは爆發するものなり燈火に用ふるには斯の如き高壓も高熱も起らされども金屬例へば銅の如きものを觸れしむれば爆發性の化合物を造り危險なりといふ

●膓窒扶斯の殺菌劑　英國のルイ、パーク氏博士は膓窒扶斯熱のバチルスを全滅するの藥を發見せりといふ其藥は重硫化ソヂユーム液にして此物一グラム水一ポンドの割合に混ずるときは水の純粹たる性質を害することなく盡く黴菌を殺し得べしと此物は小さき板の如き固形體となすことを得れば携帶に尤も便なりといふ

●女子と職業との關係　女子をして男子と同一の業務に就かしむることの可否に就きては學者間に未だ一定の説なきが有名なる獨逸の精神病專門學者チムメル教授は此程獨逸墺地利露西亞瑞西の女子に就きて研究の結果女子をして男子と同一の職業に於て競爭せしむるときは女子に發狂者の數を增加すること驚く可き程なりとの事を發見したり教授の舉げたる一例に曰く獨逸の女教員中精神病に罹り居るものは男教員の二倍なりと是に依り考ふれば女子は男子と同一の職業に於て到底競爭する能はざる如し

●體力と砂糖との關係　世界に尤も多く砂糖を食用として消費するは英米人にて兩國人の過去半世紀の

間に其體格は其身長重量に於て非常の發達をなし著るしく健康を増したるは要するに多量の砂糖を食したる結果なんとてウイラフビー、ガードナー博士は製糖所の勞働者ナッツノ常食のアラビヤ人甘蔗を食ふ黒人種北極探檢者高山に登るもの及特殊の食物を給せらるゝ獨逸等の實例を擧げて砂糖は氣力を盛ならしむるものなりと賞揚せりといふ

●トラホーム豫防に關する建議　群馬縣々會議員下村善右衞門氏は同縣知事を訪ひ「トラホーム」の恐るべき傳染眼疾なるに拘はらず世間の之を忽にするの傾きあり同縣下の如き諸工場の工男工女を初め學校生徒より其家族に至る迄其病害を被らざるものなきをもつて該病を傳染病豫防規則の範圍内に加へんことを本年の議會に請願書として差出す筈なりといふ

●松葉の效用　近刊米國雜誌中松葉は肺病患者に效能ありとは五十年前に發明されたる所にして松葉より製造したる彈力あり香氣ある纖維を以て滿たせる枕を用ゐるときは不眠若くは喘息の快癒に實效を奏すべしといふ其他松葉より油を取り纖維を以て布に織り若くは其香氣を菓子砂糖卷煙草に加へ又之を化粧石鹸の製造に用ゐ其效能顯著なりとて米國オレゴン州の一工場に於ては盛んに之れが製出を圖り居るといふ

●ベルツ博士と女子大學　氏は曰く獨逸は女の多く男の少き國なれば自然女子自活の法を立てねばならぬ之には女子大學も必要なるも日本の如き婦人より男子の多き國柄では大概嫁して人の母となり子を儲けることか女の大責任となり居る故獨立の生計を營むの用意は不必要にて日本には女子大學を置くには及ばぬと思ふ云々此説一理あるも女子の位置を高むる上に於ては蓋し尤も必要なるべし

●酸素瓦斯の新療法　此程倫敦皮膚病院に於て酸素

瓦斯の諸病の療治に効驗あることを發見したるは醫術界に於ける近來の一大進步と謂ふ可し今其實驗したるを聞くに同病院にて一婦人の患ひたる禿頭病を醫するに酸素瓦斯の使用に依りて數週間の療法を施したるに其効驗著しく現はれて頭髮は元の如く毿々として發生するに至りたり又此療治を以て或眼病者に試みたりしが一ヶ月間を出でずして全治するを得たり且つ此酸素瓦斯は肺病の治療に最も特効ある由にして肺患者をして絶へず此瓦斯を呼吸せしむるを得ば其病根を撲滅するに大効力ありて現に此酸素瓦斯の療法に依りて肺患者の全く快癒せし者ありしと云ふ如何のものにや

●伯林警察と衛生上の注意　伯林市の警察は衛生に熱心なること他に北比を見ざる程なるが此程又一の警察令を發し諸商店に於て麵包菓子果物の類を手にて排扱ふことを禁じ違反するものは重き罰金を課することゝなしたる由なりこは聊か極端なるが如くなれども注意の斯く迄に行届きたるは大に喜ぶべきことなり我邦の商店の如く商品を店頭に曬して塵埃に塗れしめあらゆる黴菌の巣と爲すをも意とせざるは不注意の極といふべし

●室内寒冷法　米國シカゴの一市民は各戸の内部に管を通じ絶えずアムモニアを送りて室内を寒冷ならしむる方法を案出したりとこは現時大なる屠牛場に於て行はるゝものと略同一にして此法によるときは如何なる酷暑にも苦熱を感ぜずといふ科學の進步も又進みたりといふべし

●喀痰禁止令　喀痰は肺結核の傳播に非常に有力なることは人の知る處なるが米國紐育州にては嚴重なる禁止令を發し公開建築物、鐵道客車、客用船舶其他の床面に痰唾を喀出するときは法令違反として五百ドルの罰金若くは一年の禁錮に處し或は兩刑併せ

科することとあるべしと云ふカク迄嚴重に勵行せば實際の價値は表るべし

●醫學の爲に身を犧牲に供す　蚊は最も恐る可き傳染病の傳播者なりとは屢〻本紙に記したるが此程ハヴアナに於て蚊の實驗の爲に身を犧牲に供したるものあり此者は西班牙人にして同地の醫師カルダスが黃熱病の血液を發明し其效力を試驗せんとするを聞き自ら進んで其實驗の材料たらんことを求め實驗中黃熱病患者を刺したる蚊に刺されて四日の中に死去したるなりと云ふ

●鷄卵中のジストマ　警視廳の岡崎警察醫は支那朝鮮地方より輸入せる鷄卵中にジストマ（蛭虫）の棲み居ることを發見し其後岡江警察醫は熱心に之が研究に從事しすしや叉は鷄卵を使用せる飲食店に就き卵殼を貰ひ受け顯微鏡的試檢を行ひしにジストマを發見したるもの少からず但しよく煮沸すれば害なしといへとも其儘食用に供するは危險にして該虫の人體に入り害を爲すことは岡山及九州地方に其例少からずといふ尙檢微鏡院長遠山椿吉氏も研究中なれば近〻其結果を報告すへしといふ

●結核患者の取扱　今や八種の傳染病以外に恐るへきもの病症は二三に止らざれども肺結核、淋病、丹毒の如き尤も恐るへきものなり就中肺病の如きは遺傳よりは寧ろ傳染性の烈しきものなるも醫師は家人若くは病人の感情を害さゞらんことを懸念して其害を明かさゞるが爲め飮食器物等一切共用して注意力少きが爲めに病毒はます〳〵蔓延して底止する所を知らざるに至るされは近〻之れも中央衛生會議に上せ決行せんとの議ありといふ米國の咯痰令と均しく勵行したきものなり

●府下傳染病の現況　時候の變り目とて赤痢、腸窒扶斯、實布垤里亞等の傳染病に罹る者あれども昨年

に比しては極して少數なりとぞ赤痢は本月一日より一昨日迄郡市合計五十二人ありて本年初發よりの患者を總計すれば市二百廿九人郡百〇四人なり即ち昨年同日迄の總計市二百卅三人郡三百十人に比し市は百〇四人少なく郡は二百〇六人少なし又腸窒扶斯患者は本月一日より去十一日迄合計七十四人にして本年初發よりの患者を合算せば市六百卅三人郡二百四十八人となり之れを昨年同日迄の統計市五百卅三人郡二百五十三人に比すれば市百人を増し郡五人を減ぜり又實布垤里亞患者は本月一日より去十一日迄十七人ありて本年初發以來同日迄市六百九十人郡百四十七人之れを昨年の市八百八十一人郡百九十四人に比し市百九十一人を減じ郡四十七人を減じたり

●産婆及看護婦試驗　東京府にては來る十月七日より産婆試驗を十一月廿日より看護婦試驗を擧行することに決定し産婆志願書は本月中に看護婦志願書は十月中に提出せしむる筈にて期限經過後は受理せずと云ふ

●普通看護法講習生募集　此度東京帝國大學醫科大學附屬醫院に於ては普通看護法講習生左の通募集す志願の者は願書に履歴書を添へ來十月二十日迄に願出で試驗期日に出頭すべし

但規則書を要する者は事務室に申出づべし

人員　四十九名給費

年齡　滿二十三年以上三十年以下の女子にして家事に係累なきもの

試驗期日　十月二十三日午後一時

試驗科目　一、讀書漢字交文二、作文往復文三、算術加減乘除四、体格

明治三十四年九月



●鳩山博士及夫人の出發

鳩山博士及夫人には豫記の如く去四日午前十時十分新橋發の列車にて出發せられたり見送人は朝野の紳

士貴婦人を以て滿たされ婦人にては本會の濱尾作子、高木かう子、松前藤子、松平芳子、德富靜子、吉武輝枝子、岡山とし子、其他潮田千勢子、山脇房子、三輪田眞佐子、穗積松子、河野鬨子、武村千佐子、武田錦子、內田陽子、片山鈍子、大澤作子、長崎妙子、清藤秋子、外國人にてはミスプリンス姉妹等其他數十名にして尙橫濱迄見送られしものも多かりき本會の高木かう子氏は夫人と同窓の故を以て令孃と共に其一行と同乘せられたり男子にては大隈伯爵、濱尾新、高木豐三、穗積陳重氏を初めとして名士多く見送られプラツドホームは立錐の地なき程なりきかくて一行は橫濱に着し郵船會社代理店西村方に小憩の上午後四時解纜の鎌倉丸に乘組み喝采の聲に送られて出發せられたり

今其豫定を聞くに九月四日橫濱解纜全二十日シヤツトル着夫れよりシカゴ、ワシントン、ヒラデルヒヤ、ニユーヨークを經て十月八日ニユーヘイブン着エール大學紀念祭に出場茲に約一ヶ月滯在夫れよりニユーヨークより乘船して英のリバプールに着し倫敦に暫らく滯在の上歸途に着かるゝ豫定にて其着京の期は明年一月十日なりといふ



●宇都宮支會と水戶行　　T．T．

今茲余は日光へ往きし途次宇都宮支會の淺田醫學士を訪へり余の同邸に至りしは午後七時頃なりき恰も氏は庭園に散歩を試みられしが余の刺を通ずるや「コレハヨーコソ」の勸迎を以て應接所へと導かれた

り茲に初對面の挨拶を了し館余に改めて親密以來各支會創立の勞を謝し先づ支會の事情より問ひ初めたり氏は巨細に詳述せられ且曰く當支會役員諸氏は何れも熱心にて假令へは例會を開くにせよ懇親會を開くにせよ傍聽者誘導雜誌配送の小事に至る迄役員相互に協同して、何れも己れの一家を經營するが如き感を以て盡力せらるゝことを話されたり

淺田氏の如きも身病院長の繁職にありながら役員の事務に練熟せざる間は一切の事務を引受けらるといふ快談數刻餘するに臨み余の大洗行を兼ね水戸市に遊説を試みんことを以てせしに氏は直ちに同市なる濟生病院長を紹介せられたり

翌朝余は宇都宮なる旅宿を出立し午前八時の滊車にて水戸に直行せり先づ水戸公園偕樂園等に至り午後は淺田學士の紹介にかゝる濟生病院長醫學士波多野惇氏を訪へり刺を通ずれは程なく同學士は面會せられたり余は先づ其來意を告げ會務擴張に付援助を與へられんことを以てす氏は極めて磊落に快活の辯を以て大に賛成の意を表せられ尚同學士は多忙をも省みず自から同市高等女學校長なる豐田芙雄子女史の宅に案内せられ紹介の勞を取られしは余の深く感謝する處なり女史は藤田東湖氏の姪に當られ以太利にも永く留學せられしとのことにて淑徳温厚の聲高しと云へり余は波多野學士同樣の來意を以て賛成を求めたるに女史も此種の計劃は固より賛成する處なりしとて既に婦人會の成立せる事などをも話され是亦充分の賛成を表せられたり茲に於て余の水戸行は全く有効となり尚將來の打合せをなし辭し去りしが夫より余は大洗に至り滯在凡一周日にして歸京の途に着けり日光宇都宮大洗平磯近傍記行記すべきことなきにあらざるも餘白なきを以て茲に贅せず

大日本婦人衛生會記事

●山形支會

●九月例會　去十四日山形市假行社に開き濟生館醫士西村幹太郎氏は赤痢豫防法に付き同加藤三郎治氏は石炭酸壊疽等の談話あり當日は雨天の爲め出席者僅十四五名に過ぎざりしと幹事中原きゑ子氏より報告せられたり

●本會の例會は規則により本月も尚休會し來月上旬開會す

寄送書

●口内攝生法　全一冊

本書は廣島なる齒科專門醫矢田部藤吉氏の著書なり卷首土方伯爵江木千之氏の題辭あり岩井禎三氏外二氏の跋あり文章平易通俗的によく口内攝生法を說きたり特に本書は天覽の榮を賜はりしとの事なり

●別項紀行文中にある如く水戸市濟生病院長醫學士波多野悖氏贊成員たることを承諾せられ又同市高等女學校長豐田芙雄子女史も以後又本會の爲め援助を與へらるべしといふ



●本會入會者

○事務所へ申込

本鄉區元町二丁目六十六、木村和歌子方	通常會員	小野村あさ子
長野縣上伊那郡上伊那町	贊成員	小林喜重君
群馬縣群馬郡下室田	通常會員	中島美彌子
岩手縣和賀郡黑澤尻町	特別會員	古川いよ子
日本區久松町廿九、杉浦方	通常會員	河合さと子
麴町區下二番町同生病院	通常會員	關野なか子
淺草區須賀町二、明治病院	通常會員	長田あさ子
本鄉區元町二丁目四十八	通常會員	大久保榮子

●上海法界永安街三德里　通常會員　織田千賀子
●帝國大學第一醫院　通常會員　礒井信子
●仝醫科大學皮膚科病室　通常會員　小林かつ子
●香川縣大川郡志度町八九八　通常會員　佐野よし子
●信州北佐久郡中佐都村信東社内　通常會員　小清水とみ子
○本郷　廣井綱子紹介
●牛込區市谷藥王寺前町七十五　通常會員　永田い代子
●四谷區右京町四十二　通常會員　大枝繁子
●四谷區内藤町一番地ホノ二　通常會員　坂田鮮子
●神戸市和田崎町　通常會員　小松雪子
●豐多摩郡下澁谷村二百八十六　通常會員　菱川糸子
○牛込　松井喜伊子紹介
●淺草區公園地　通常會員　江崎たま子
○芝　須田ふさ子紹介
●本郷區本郷六丁目回生石鹸舖　通常會員　平瀨ふさ子
○下谷　窪田しげ子紹介
●下谷區仲徒町三丁目淺野方　通常會員　小林まつ子
○淺草　鬼頭ふく子紹介
●台灣台北北門街台北尚武會弓術倶樂部　贊成員　西野華川君
○本郷　東宮富子紹介
●神田區通新石町八番地宮田氏方　通常會員　青木たか子

○深川　鍋地ふじ子紹介
●深川區猿江町九番地尾高氏方　通常會員　戸張美津子
○日本橋　前田富美子紹介
●日本橋區西河岸町十二番地前田氏方　通常會員　松本てる子
○役員　高橋孝子紹介
●豆州熱海町御用邸内　通常會員　有川仙子
○山梨　輿水政一氏紹介
●山梨縣北巨摩郡安都那村百五十二　通常會員　清水きん子
○山梨　進藤妙子紹介
●山梨縣巨摩郡若神子村[illegible]穴平組　通常會員　坂本みさ子
○横濱　磯部國子紹介
●横濱十全病院内　通常會員　蜂谷繁子
●仝　所　通常會員　本多保無子
●仝　所　通常會員　駒場常子
●仝　所　通常會員　星野梅子
○信州　小清水とみ子紹介
●信州北佐久郡中佐都村信東社内　通常會員　東城やすじ子
○牛込　增田せい子紹介
●群馬縣前橋市相生町九號舍　通常會員　小高糸子
○群馬縣　小高糸子紹介
●群馬縣前橋市神明町十二番地　通常會員　木下睦子

●群馬縣前橋市相生町六號宅舍　通常會員　長坂けい子

●群馬縣前橋市曲輪町二十四番地　通常會員　永田靜子

○丹後　石栗とせ子紹介

●丹後國舞鶴町北田邊百五十一　通常會員　河村たま子

○事務所へ申込

●備後國福山胡町六十九　贊成員　木下榮次郎君

●姫路市北條口三番屋敷　通常會員　田中直子

●高知縣幡多郡宿毛町　通常會員　淡田茂美子

●牛込區通寺町三十八、齋澤方　通常會員　黑岩福太子

●本郷區湯島五丁目順天堂内　通常會員　齊藤たね子

○長野　桑名さき子紹介

●長野市立病院内　通常會員　田中いし子

○役員　高橋孝子紹介

●深川區大住町四番地　特別會員　中村伊曾子

○信州　小林喜重君紹介

●長野縣上伊那郡手良村字中坪　贊成員　海野倭吉君

○本郷　東宮富子紹介

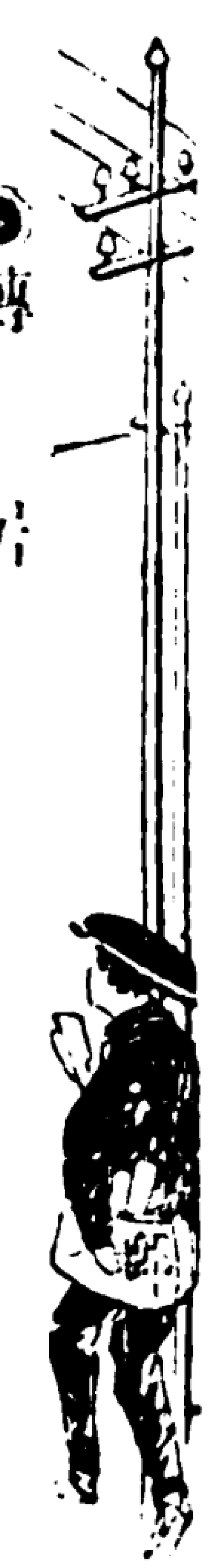
●栃木縣栃木町石町三十一番地　通常會員　淸水幸子

○幹事　中原きゑ子紹介

●山形支會入會者

●山形市　通常會員　大橋あり子

●仝　通常會員　大谷かつ子



●轉居

會員諸氏御轉居の際は乍御手數事務所宛必ず御一報相願候

●山梨縣北都留郡廣里村字花咲第二官舍へ　土橋改廣瀨倉野子

●京橋區築地三丁目十五番地へ　濱田みき子

●台北撫台街二丁目二十一番地へ　熊城照枝子

●長野縣南安曇郡三田村内川辨進氏方へ　小林靜子

●肥前國佐世保泉州屋へ　辰巳富野子

●越後國南蒲原郡欠附村其附病院へ　二宮とく子

●越後國中魚沼郡谷内村へ　内山恭子

●千葉縣市川町五百四十八へ　大迫隆子

●埼玉縣浦和裁判所官舍へ　黑田哲子

●近江國大津市松本高見町三百三十三へ　大谷てふ子

●赤ヶ間關今後地村字山の口へ　瀧川美知子

●伊豫國三津濱梅田町三丁目九十五へ　守屋彌壽子

●北豐多摩郡元金杉日暮里村千六十七西方氏方へ　佐藤絹子

●牛込區東五軒町三十五番地へ　曾根しん子

●本郷區元町一丁目三番地へ　越智雪子

●麴町區三番町三十六番地へ　岡田德子

●麴町區中六番町十二番地へ　小山田かち子

●赤坂區福吉町一番地へ　黒田清子
●天鹽國公立増毛病院へ　平尾房吉君
●麹町區元園町二丁目六番地一心館内へ　山口まき子
●日高國浦川支廳第一號官舍へ　西　久子
●大坂市東區仁右エ衛門町番外[illegible]、東華女學校へ　長光喜世子
●本郷區元町二丁目六十六番地今井時太郎氏方へ　今井壽美子
●熊本市一番彼分町一番地へ　渡邊千賀子
●横濱市福富町三丁目八番地井上氏方へ　湯淺政代子
●對州竹敷要港部官舍第五號へ　上泉久子
●丹後國舞鶴町字北田邊百五十二番戸へ　石栗とせ子
●麹町區中六番町十二番地へ　小山田かち子
●本郷區弓町一丁目廿五番地森富市方へ　須田ふさ子
●日本橋區藥研堀町十九番地高田方へ　高塚せつ子
●麹町區道三町二番地へ　久保田不二子

今般土橋倉野子は左の通り改姓せられたり　廣瀨倉野子

◉交換寄送雜誌（八月分）（順不同）

●日本婦人　第二十二號　東京帝國婦人協會
●日本婦人新聞　第七號　廣島日本婦人新聞社
●統計學雜誌　第百八十四號　東京統計學社
●統計集誌　第三百四十五號　東京統計協會
●中外藥報　第四十八號　東京中外藥報社
●料理新聞　第十二號　大坂料理新聞社
●をんな　第八號　大日本女學會
●よろづ報知　第二十一號　扶桑通信株式會社
●體育　第九十三號　日本體育會
●大日本私立衛生雜誌　第二百十九號　大日本私立衛生會
●團々珍聞　第千三百三十三號　東京珍聞館
●通俗衛生　第三十七號　大坂私立衛生會
●藥石新報　第四百一號　大坂藥石新報社
●藥學雜誌　第二百三十四號　東京日本藥學會
●健康乃栞　第三號第四號　廣島健康乃栞社
●婦人新報　第五十二號　東京婦人矯風會
●婦女新聞　第六十七號第六十八號　婦女新聞社
●工業雜誌　第十五卷二百二十六號　東京工業雜誌社
●山陽新報　第六千七百四十八號　山陽新報社
●草藥新聞　第二百二十六號　草藥新聞社
●教育實驗界　第八卷第三號第四號　東京育成會
●淑女　第三卷第八號　東京紫瀾社
●衛生新聞　第五號　東京衛生新聞社
●廣島衛生醫事月報　第三十二號　廣島同社
●光之庭　第四號　東京以文會



卷首口繪の解

卷首の口繪は京都看病婦學校々舍及卒業生の寫眞にして本會へ寄送せられたるものに係る同校は明治十八年の頃同志社新島氏の外人と謀り創設したるものにて同氏の死後今日迄ドクトル佐伯理一郎氏管理せられ毎年十數名の卒業者を出し又產院に於ては專ら慈善的施療をなし居るといふ同校の如き完備せる看病婦學校は都下にも又多く見ざる處なり

弔詞

伯爵夫人小笠原純子氏は明治廿九年中本會評議員の任を負はれしが去る十七日病氣の爲め逝去せられたり

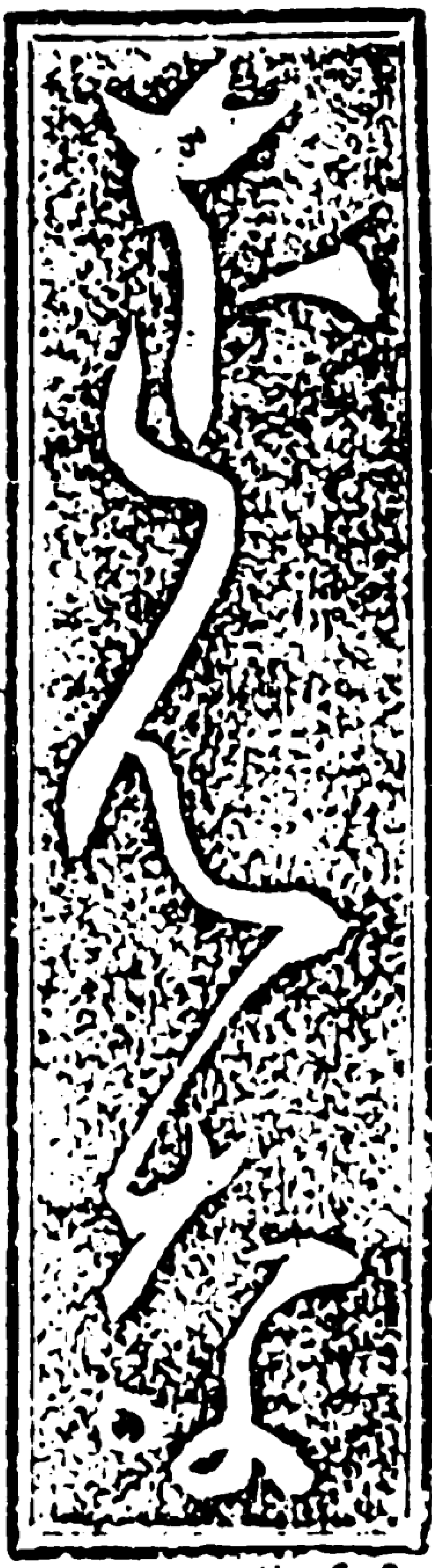
本會は謹みて哀悼の意を表す

大日本婦人衞生會

尚同邸へは濱尾副會長參向せられ事務所よりは葬儀當日會葬せり



總裁小松宮大妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人
大日本女學會發行
（東京麴町區土手三番町二十八番地）



第八號發兌
每月一回廿五日發行 定價金拾五錢 送料全國無遞
第壹號以下再版出來せり

大賣捌 東京神田區表神保町一番地 東京堂

本誌は學識と經驗とに富み而も婦人問題に熱心なる諸名家の賛助より誠實に女子の本分を完ふせんとを心がけらる淑女達の友たらんとを期し世の俗流に阿りて漫りに讀者の多からんとを望まず總て不要の裝飾を省きて專ら記事の精撰に努め以て婦人雜誌たる品格を保たんとす◎本誌は其綱を論說學藝修身齊家世務の史傳譚艸詞藻雜錄時事彙報に別ち普通に揭載する家政上文學上の記事の外に（一）科學の大意を揭げ學理の概念を得しめ（二）和漢名著の綱要を揭げ諸書の渉獵に便ならしめ（三）法制理財の事を平易にものし著き時事を說明し內外の情勢に通せしむ◎本誌の記事は語格文法は勿論振假名の句讀に至るまて誤認なからんとを期し野卑なる言語又は劣等なる戀愛に關する文字を避け且つ賣藥其他下品なる廣告を揭げず◎本誌は勤儉貯蓄の美風を獎勵せん爲に每號慈善貯金切手を揷入して其模範を示す

第八號目次

大日本婦人聯合會機關

婦女新聞

毎週月曜

婦女新聞は明治三十三年五月十日皇太子殿下御慶事の紀念として第一號を發行し爾後毎週月を誤りたることなし

（定價）一部金三錢▲一ヶ月十二錢▲三ヶ月三十七錢▲半年七十二錢▲一年一圓三十五錢▲全國無郵稅▲郵券代用は一割增▲見本に限り往復はがきにて申込あらば呈す

（社說）は常に婦人界の羅針盤となり（訪問）は名流の女子教育談、家庭談、學術談を掲げ（子供）は無邪氣の子供の行爲を集め（家庭）には主婦の心得となるべき事柄（參觀）は女學校、孤兒院、工場等の參觀記（小說）は純潔清新のもの（衛生問答）は衛生に關する一般の質問に答へ（はがきよせ）は讀者の聲にして婦人の輿論をこゝに見るべし（雜報）は婦人として心得べき社會の出來事及び全國の婦人會女學校の消息を傳へ（東西南北）は世界の出來事に對する二行の短評なり其他（科學）（講義）（文苑）（演壇）等いづれも有益、苟も時勢に後れざらんとする婦人は必ず本紙を讀まざるべからず卑猥なる記事を以て充たされたる新聞紙に眉を顰むる人は乞ふこの婦女新聞をとりてその清潔なる家庭の友とせられんことを。

發行所 東京市神田區三崎町一丁目十番地 婦女新聞社 電話本局二千六百九十七番

特約販賣店 東京堂▲東海信文合資會社▲北隆館▲盛文堂▲勉强堂▲其他重なる雜誌店

顧問大和田建樹

淑女

◎定價、一冊八錢、半年四十六錢、一年九十錢、

◎發行、毎月一回、十五日發行

◎郵稅、全國みな本社の支辨にて、讀者は一厘も拂ふに及ばず。

◎本社、發行本社は、東京市四谷區南伊賀町十六番地◎

◎代金、往々葉書にて見本を送れなど、の申込あれども、本社は前金に非ざれば、一切發送せず◎

◎郵券、郵券代用の場合には、必ず一割増の事、

淑女第三卷第九號（九月發行）要目、

▲口繪　暗射故事　華族女學校教授　鳥山啓
○夫婦共稼、　十津川文武館長　泰政二郎
○禮式　名古屋高等女學校長　市守譜吾
○料理　石井料理教場長　石井泰次郎
○信濃の孝女　掲載故人　吉田知足
○暗射故事解　華族女學校教授　鳥山啓
○矢筈の山ふみ　華族女學校教授　萩原正平
○松下泉　華族女學校教授　鳥山啓
○偶成　貴族院議員　武市庫太
○桂花詞　女子高等師範學校教授　三輪義方
○曉窓漫筆　白雲生

明治三十二年一月以來休みなく本月にて三十三冊目即ち第三卷第九號を發行せり最初より取揃へたきものは殘本の切れぬ内申込むへし

東京市四谷區南伊賀町十六番地
紫鸞社

會員募集

産婆學雜誌

○毎月一回五日發行
○會員には無代價配布
○會費一ケ年金一圓

何故に本紙を發行したるかと云ふことは、本誌紙上に掲げたる本會設立の趣旨書を讀みて知らるべく、尚同巻末に掲げたる本會々則をも一覽せらるべし。一昨年七月産婆規則の勅令出で、同年九月内務大臣、産婆試驗規則及産婆名簿登錄規則を制定して茲に産婆の地位一入高まり、斯道を研究發達せしむる必要の更に切なるを感じぬ。現に産婆の業に從事して此日進の學問に遲れざらんことを希へる諸姉、將來此學業を修めて世に立たんと志せる諸姉、妊婦、産婦、褥婦の病を介補せらるゝ看護婦諸姉を始めとし、一方に於ては病者の治療に從事せらるゝと同時に一方に於ては産婆及看護婦を學問上及實地上に指導せらるべき醫士諸君は云ふを待たす、尚も一家の主婦となり其健康を增進し、安らかに分娩を了へ、健かなる世繼をまうけて、家門の繁榮を望まるゝ貴夫人令孃、さては家庭の衛生を重んじらるゝ紳士諸君に至るまて、猶ひて此界に興せらるべきことを信じて疑はず、あらず、是等の諸君は此界を耳にせられなば、必ず同志を促して加入せしめたまふなるべし。御住所姓名を明記したまひ事務所に迄申込まれなば雜誌は逐號發送することを怠らざるべし。更に希望すべきは會員諸姉諸君の、分娩時及其前後幷に婦人の衛生、嬰兒の保育等に就て、其見聞せられたるところを報道せられたきことなり。病婦の症狀、及其原因、并に療法、妊婦の攝生、嬰兒の取扱、乳母の撰擇等に關する質問、提議、經驗談、何れも之を歡迎せん、其報道につきては意味だに明かならば文の良否、文體の撰擇なと諸君か心のまゝなり、唯範圍外に涉れる言論、人の私行を訐ける人身攻撃等を忌むのみ、更に希望するは毎月一回の例會、毎春一回の總會には、缺くることなく出席したまひ、其抱持したまへるところの高説をもらしたまはんことなり。

東京日本橋區濱町三丁目七番地
産科婦人科楠田病院内

日本産婆學協會事務所

◎女子高等師範學校附屬幼稚園內フレーベル會發行

●女子教育の指針
●幼兒保育の燈明
●唯一の家庭雜誌

婦人とこども

定價壹冊金拾錢六冊前金五拾七錢拾二冊前金壹圓拾錢郵稅壹冊壹錢

紛々たる世俗の潮流と離るゝことと能はず、出るもの〳〵皆等しく千篇一律趣味なく主張なき女學雜誌たるが中に本誌は獨り健全なる主義を持せる家庭雜誌として出でたり。家庭教育は實に國民教育の基礎、併ふ方今我國家庭教育は紛々擾々として定まる所なし、本誌は實に紛亂極りなき我が家庭教育の燈明たらんどして出でたるなり。國家の盛衰は偏に未來の母たる女子教育の消長に關す、併も我國方今女子教育の方針は漠として定まる所なし、本誌は實に此定まる所なき方今の女子教育に向つて完全なる指針たらんと欲して生れたるなり。趣味の教育は我國人の一般に缺乏せる所、本誌は又其缺を補はんことを勉めたり。生れて未だ一歳ならず、併も日に月に進歩發達して今や優に女學界の一大勢力となるに至れり。

第一卷第九號　九月五日發行

●(卷首)パッヒエル氏名畫エリー湖上ペルリの勝利。●(子ども)丈助の忠義、室內遊戲、最よき紹介狀、一口噺、考へ物●(家庭)母の言葉　高木四郎、小さき日記　印東おとな、料理法　石井泰次郎、●(學術)夏の游逸、(講義)兒童研究法　松本孝次郎、●(史傳)野村望東尼　下村三四吉●(文苑)古茂藏新保磐次の其他和歌新体詩數、●(說林)幼稚園保姆に望む、忍耐と取越苦勞、●(寄書)數篇●(雜錄)九月の天地　まか生、汽車旅行と道連の幼兒　ひさ子、女監を見る　涉生、印度土人の家庭生活……Y、I●(彙報)數十件

發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

帝國婦人協會發行

日本婦人

第貳拾貳號
八月廿五日發兌

「日本婦人」は、創刊以來常に世の風潮に先んじ、自ら期して巾幗社會の指導を以て任せり。其記事體裁の高尚優雅にして、俗流に超越せるは、既に世の定評ある所なり。

思ふに搖籃を搖かすの手は、以て能く天下を搖かすに足る、社會風潮の清濁は、其源男子にあらずして女子に在り。一家を釐正し一國の風敎を善美ならしむるもの實に女子の勢化によらさるを得んや。顧みて我國現下の狀態を見れば、新舊過渡の時代にありとはいへ、萬つ錯雜紛亂、婦人社會の事、之を往昔に比して、寧ろ萎靡退歩せるの感なき能はさるなり。吾人德薄く、力非なりと雖とも敢て吾か信する所を以て、其微力の盡くるまて、世の至仁眞誠志を同しうするの諸賢に、其同情同感を覓めんとす。

「日本婦人」は斯くの如き意氣、斯くの如き微衷を持し、孜々黽勉、而かも徐ろに、婦人社會の木鐸となり、風敎を純正齊一ならしめ、以て聊か貢獻する所あらんことを期す。

次號よりは、發行期を十五日とし、記事體裁も共に革新する所あるべし。

要目

毎號懸賞

和歌募集

毎月一回　定價一部金拾五錢
郵税一册金壹錢
會員へは無料にて配付す

麴町區元園町二丁目四番地
帝國婦人協會
電話番町六四六

私立大日本婦人衛生會宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衛生會宇都宮支會ト稱ス

第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク
會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス
各役員ノ任期ハ一ヶ年トス

第參條 毎月壹回(第壹日曜日)講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス

第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ
本支會ヲ脱會又ハ本會ヲ退會セントスル件ハ其旨事務所ニ届出ツベシ

第五條 本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ
會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二ヶ月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ

第六條 本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス

第七條 講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又タハ知合ノ婦人ヲ誘引シ陪聽セシムベシ

第八條 服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス
上着及羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ

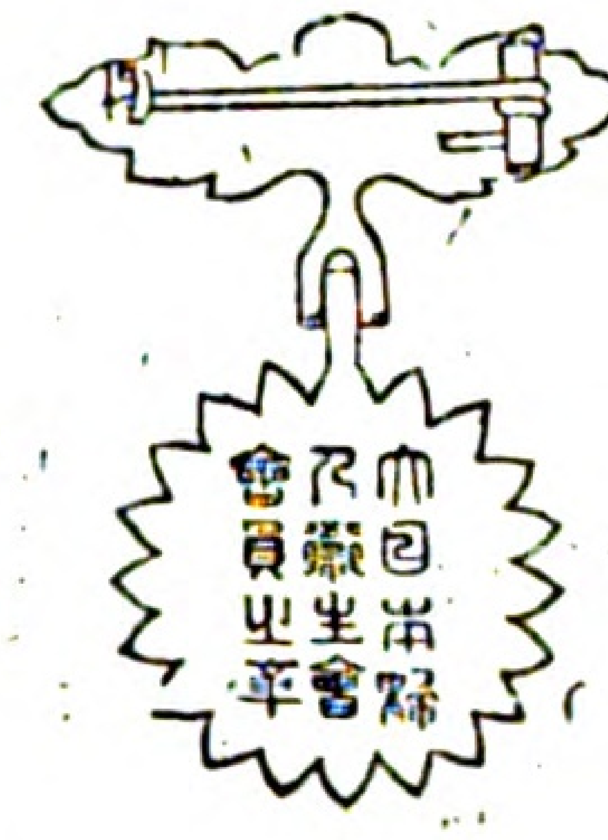
第九條 特ニ支會規則ニ掲ケザルモノハ本會ノ規則ヲ沿用ス

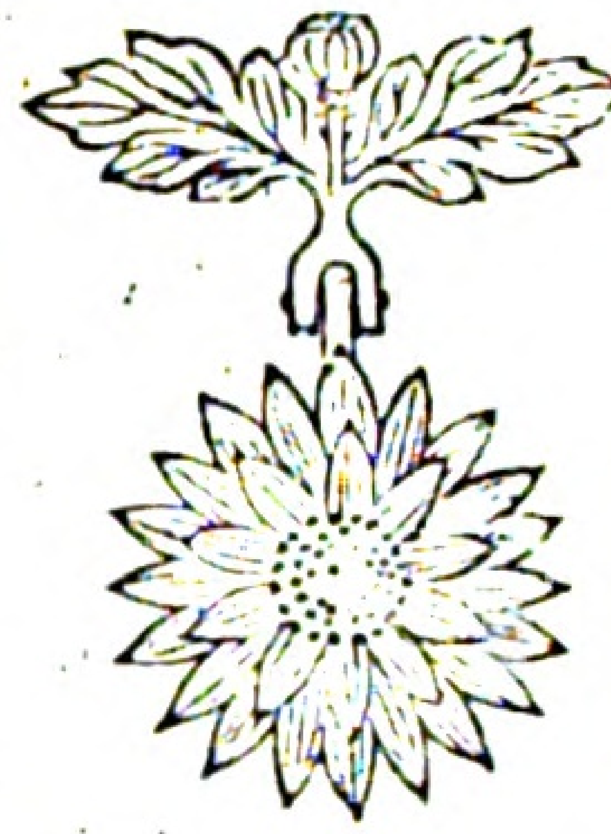
明治三十四年二月三日創立

宇都宮支會

事務所宇都宮市西塙田町淺田方

大日本婦人衛生會廣告





一本會從來の會員券は粗末なるもの故隨て遺失汚損し易きため先般來上圖の如き本會徽章を調製し御申込の諸氏へ頒つ尙御入用の御方は事務所へ御申込あれ、

一本徽章は襟留兼用に製せるを以て集會の際は勿論成るべく平素御用ゐ被下度左すれば自然本會の廣く江湖に知れ渡り普及の一端とも可相成候

一本徽章は通常會員章第一號メッキ製一個十五錢●同第二號正銀製一個五十錢●終身及び特別會員章(第三號)一個一圓外に一號及二號送料六錢三號章送料九錢

明治卅四年七月　東京市牛込區矢來町三番地

私立大日本婦人衛生會

齒科診療

齒科醫　高橋孝子

齒科醫　高橋虎一

東京本町二丁目

▲電話本局千六百六番

看護婦派出

汎ク醫家患家ノ御需メニ應ズ

日本橋區濱町二丁目四番地

日本橋看護婦會

妊婦診察所

遠近ニ係ラズ妊婦產婦ノ御依賴ニ應ズ且ツ便宜上當所ニ產室ノ設ケモ有之候

同區同町同番地

大學卒業產婆　森川タメ

私立大日本婦人衞生會 新潟支會規則

第一條　本會は大日本婦人衞生會に屬し婦人衞生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり

第二條　當支會の會員は左の六種とす

終身會員　一時限り出金貳拾圓
特別會員　毎月　金參拾錢
　　　　　仝　　金貳拾錢
通常會員　甲毎月　金拾錢
支會員　　乙仝　　金五錢

第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし

第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衞生雜誌を配布す

第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衞生慈善資金とす

第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く
會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す
各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす

第七條　支會は毎月六日通常會を開き衞生及び慈善に關する演説をなすべし

第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す

第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし

第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし
會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし

第十一條　一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす

第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし

第十三條　特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衞生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

新潟支會

事務所新潟市旭町一番町十番戸
河上フサ子方

私立大日本婦人衞生會 山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衞生會々員山形市在住者を以て組織す

第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名商議員若干名を置く
會長副會長は公撰し幹事商議員は會長之を撰任す
役員の任期は一ヶ年とす

第三條　本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす

第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依頼すべし
本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし

第五條　本會々費は會計幹事に納むべし
但し六ヶ月又は一ヶ年分
新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし

第六條　服裝は精誠質素なるを要す
上着及羽織は絹布を用ゐるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

山形支會

事務所山形市旅籠町新築西通二百八十九、北島氏方

●大日本婦人衛生會規則摘要

一本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究せしめ衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

一會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

一入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込むべし入會者には黃菊若くは白菊の會員章を交付す

一會員を分ちて終身特別及通常の三種とす

一終身會員は一時に金拾圓以上●特別會員一ヶ月金貳拾錢以上●通常會員一ヶ月金拾錢を納むるものとす●男子贊成員亦同じ

一男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じと雖も本會に功勞あるもの又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる者は役員協議に依り無會費とすることあるべし

一會員は本會に於て毎月發行する雜誌を無料にて受ることを得退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より又通知すべし但既納の會費は返戾せず

一集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす
　但毎會學識經驗ある者に衞生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす

一會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を陪聽せしむることを得(勤めて衣服は質素たるべきこと)

一講義演說等は男子の傍聽を禁す但贊成員若くは會員縁故ある男子は此限にあらずと雖も贊成員の外は本會の都合に由り臨時謝絕することあるべし

●支會

一地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

一本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載し申出つべし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報知すべし

一本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす尙詳細は本會事務所へ承合すべし

御入會注意

新入會の際は三ヶ月以上の會費と相當徽章代通常會員章(銀メッキ製拾五錢)又は(正銀五十錢)終身及特別會員は銀鍍金章(金一圓)を添へ**必らず前納**にて申込まるへし然らざれは雜誌發送致し兼候但し東京府下に限り毎月會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候也

　追て支會々員は支會へ會費納めらるべきことゝす

一會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局(東京牛込郵便局)宛振出あるべし又通運便何にても差支なし

一會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に郵券三錢を添へらるべし
　但止むを得さる場合には郵券を代用するも妨げなしと云へども總て一割增とす

一轉居せられたるときは其旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

一會員中若し本會の障害となるへき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざるものは役員會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし

廣告料	
一行	十錢
一頁	參圓
總て前金	

本誌定價一部廿錢　毎月一回發行

東京市牛込區矢來町三番地中丸、四
發行所　私立大日本婦人衛生會
東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行者　田中德三郎
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　戶上義章
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

明治二十六年[illegible]第三種郵便物認可（明治二十八年十一月十八日內務省許可）